

葉子

金塚悦子

作・・・・・・・・・・・・・・・・金塚悦子  
演出・・・・・・・・・・・・・・・・川口啓史

### キヤスト

久坂葉子(または澄子)・・・・・・・・松本紀保  
老女(または手相見)・・・・・・・・岩崎加根子  
父(または蕎麦屋)・・・・・・・・深水三章  
島尾敏雄(またはたこ焼き屋)・・・・・・・・千賀功嗣  
晴彦(または輪投げ屋)・・・・・・・・齋藤隆介  
島尾ミホ(女2・ラムネ)・・・・・・・・みさお  
駅員1(または杏子飴)・・・・・・・・羽場涼介  
駅員2(またはわた飴)・・・・・・・・宮川崇  
駅員3(女1・ヨーヨー釣り)・・・・・・・・木村江里子

### スタッフ

舞台総合監督・照明・・・・・・・・沖野隆一  
美術・・・・・・・・加藤ちか  
音響・・・・・・・・松本昭  
衣装・・・・・・・・イカラシヒロコ  
映像・・・・・・・・浜島将裕  
舞台監督・・・・・・・・岡島哲也  
企画制作・・・・・・・・藤澤義公  
堤智子

## プロローグ

正面のスライドに光がはいる。

ほの白い顔で、でも明るく微笑んでいる久坂葉子のセピア色の写真。  
シャンソン聞こえてくる。

スライド、ゆっくりと消えていくー

シャンソン少しづつ少しづつ変調していき、奇妙なノイズになっていく。

そして電車の急ブレーキ音が変わっていく。  
かなり衝撃的な高い音が響く。

女の声 キヤーツ

駅員のアナウンスが聞こえてくる。

駅員の声（緊迫した声）「ただいま、東急田園都市線三軒茶屋駅にて人身事故が発生いたしました。渋谷駅より中央林間駅  
までは運行を中止しております。お急ぎのところ恐縮ですが、ご乗車のお客様はそのままお待ち下さい」

ガヤガヤとした声たち。

女1（駅員3）えっー、ふざけんな！

昨日まで仕事仕事で大晦日の今日、やっと帰省できるっていうのに。  
一か月百時間以上の残業につぐ残業。

ブラックってわかってるけど、それしか仕事がない。  
やっと、やっと休める。

実家でのんびりお正月過ごす事だけ楽しみに頑張ってた。  
せつかくとれた新幹線なのに、間にあわなくなったら、どう責任とんのよ。  
もう、死ぬなら死ぬで、誰にも迷惑かけんな！

男1 (晴彦) おいおい、嘘だろ。冗談だろ。

3時にはあさんの家に金とりにいくって約束してんだよ。

どれだけ手間かけたと思ってるんだよ。

何度も何度も電話して、ああだこうだと嘘を重ねて、ギリギリでやっと二千万用意させたんだ。

正真正銘今年最後のかい山なんだぜ。

失敗したら、年も越せないんだぜ！

女2 (ミホ)・・・ああ、いやだ。・・・いやだ。いやだ。いやだ。

私が出かけるたびに、何故か人身事故が起きる。

私ってなんでいつもこうなのかしら。

私になにかが、とりついているのかしら。

縁起が悪すぎる。

ああ、また、来年もきつと悪いことばかりが起きるんだわ・・・

そうにきまつてる・・・。

男2 ・・・(困った表情で、腕時計を見ている。しばらく思索しているが、ふと前方に向かって、合掌のポーズをとる)

駅員1, 2, 3が舞台上に駆け込んでくる。

駅員1 (息も荒く) わ、若い女のようにです。かなり激しくれき断されています。遺体の肉片があちらこちらに飛び散って

います。警察の現場検証もありますし、処理には50分から1時間はかかるでしょう。

駅員2 一時間！・・・。振替輸送しかないな。至急連絡だ！

駅員3 それが・・・主任・・・。

駅員2 どうしたんだ？！

駅員 3 東急東横線、自由が丘駅でも同じ事故が。いまより約五分前です。  
駅員 2 なんだと！

駅員 3 山の手線、田端駅、中央線、中野駅、東武線、押上スカイツリー駅でも  
同じ人身事故です！

駅員 2 なに！？同時多発に！じゃ、首都圏は全滅じゃないか。

駅員 3 はい。そういう事です。

駅員 2 間が悪いな。っていうか悪すぎる。今日は大晦日じゃないか。大つごもりだぜ。皆が日本で一番忙しい日じゃないか。

駅員 1 多いらしい・・・です。

駅員 2 ・ ・ ・何が？

駅員 1 大晦日には・・・

駅員 2 飛び込みが・・・。

駅員 2 えっ・・・！

駅員 1 ・ ・ ・色々差し迫った事情においこまれるのでしょうか？

駅員 2 それとも、我が身の侘しさが一層こたえるのでしょうか？

駅員 2 ・ ・ ・明日、明日になれば新年がやってくるというのに。

駅員 2 (しばらく茫然と聞きいつているが)

馬鹿野郎！

・ ・ ・そ、そんな事どうだっていい。

処、処理を迅速にやれ！

まず関係各所にただちに連絡遂行します。

よし！

救援依頼と待機車両の確認。

そうだ。

駅員 3 それと、連絡路線と振替輸送可能路線バスを至急検索します。

駅員 2 うむ。

駅員 3 乗客誘導優先で一分でも速やかに処理いたします！

駅員 1 頼む。

頼むぞ！

本当に頼りになるよ。君は。

駅員 3 有難うございます！

自分にははじめての人身事故処理なんです。

駅員 1 おお、そうか。

駅員 3 精一杯頑張ります。

では！

駅員 3、駅員 1 をチラッと見るが、携帯電話で何か連絡しながら、駆け出ししていく。茫然と立ちすくんでいる駅員 1、2。

駅員 2 (座りこんでしまう)・・・ああ、全く、なんてついてないんだ。

金かけて、ホームドア設置したって、結局なんの役にも立たねえじゃないか？膨大な損失なんだよ。

また何いわれるか、わかんねえぜ。

あーあ、減給の対象になったりして。

駅員 1 ……どうして・・・こんなことを・・・？

駅員 2 えっ！？

駅員 1 ……何故、あの人は飛び込み自殺なんかしたんだ？

・・・一体・・・なにがあったんだ・・・。

駅員 2 なに、ぶつぶついつてんだよ。お前は。

早く部署に戻ってやることやれよ。

駅員 1 ……よりにもよって今日は大晦日じゃないか・・・。

明日は希望に満ちた新年じゃないか・・・。

駅員 2 なんだよ。お前。

駅員 1 ……なんでそこまで追い詰められたんだ・・・。

駅員 2 おい！

さつきからなに青臭いことばかりいつてんだよ。

駅員 1 これからのすごい混乱を少しは考えるよ。

駅員 2 ・ ・ ・ 毎日のように人が飛び込む。死んでいく。まるでごく当たり前のように。 ・ ・ ・ 人が死んでいく。 ・ ・ ・ はあ？

駅員 1 ・ ・ ・ 人が ・ ・ ・ 一人死んだんですよ。

それ、自らの意志で。

だから？

駅員 2 平気なんですか？

何故そんな行動をとったのか、想像しようとしませんか？

駅員 2 ・ ・ ・ お前 ・ ・ ・ ねえ。

駅員 1 僕は、シヨックだ。

あの若さで ・ ・ ・ 。

この目で見たんです。

見てしまったんです。

彼女がとびこむ瞬間を ・ ・ ・ 。

きれいな人だった。

まるで、鳥が羽根を広げて飛び込んでいくように宙を舞った瞬間、電車がすごい勢いで ・ ・ ・ 。

駅員 2 ・ ・ ・ 。

駅員 1 あの横顔が目に焼き付いている ・ ・ ・ 。

駅員 2 ・ ・ ・ 。

駅員 1 ・ ・ ・ 足が ・ ・ ・ 震えて ・ ・ ・ 動けません。

とても業務になど ・ ・ ・ つくことは ・ ・ ・ できません ・ ・ ・ 。

人身事故の一つや二つで、そんなやわな事いつてるようじゃ、このご時世とっても電鉄会社は務まらねえぞ。

駅員 1 ・ ・ ・ 本場にそうでしょうか？毎日毎日電車に飛び込み、人が死んでいく ・ ・ ・ 。

血が吹き飛び、首も吹き飛び、内臓が飛び出し。

駅員 2 ・ ・ ・ 。

駅員 1 ・ ・ ・ 本場に本当にあなたも、何も感じていないんでしょうか？

駅員 1、駅員 2 につめよっていく。

駅員 2、はっとしたように駅員 1を見つめる。

二人、改めて見つめあう。  
しばらくの間があるー

駅員 1  
・・・わかっていきますよ。

・・・本当はあなたも内心動揺してるんだ。

駅員 2  
えっ！

駅員 1  
本当はあなたもすごいショックを受けているんだ。

駅員 2  
や、やめろよ・・・！

駅員 1  
必死で平気なふりを装っても本当はあなたも。

駅員 2  
やめろっっていうてるだろ！

駅員 1  
・・・。

駅員 2  
・・・。

駅員 1  
・・・本当はあなたも・・・深く・・・傷ついている・・・。

駅員 2  
(耳をおさえて叫ぶ) やめろー！

駅員 2 頭を抱えてうずくまってしまう。

そのまま、ストップモーション。

溶暗していくー。

上手のスポット。

割烹着姿の老女が台所仕事をしている。

澄子が登場する。

鬘とマスク。

書類バッグを抱えている。

澄子  
おばさま。

女 澄ちゃん。

澄子 じゃ、行ってきます。おばさま。

女 ねえ、今日は大晦日なのよ。普通の図書館だって、そう国会図書館だってやってないのよ。一体どこでなにを調べるっていうの？

澄子 大丈夫です。今日しかわからない新しい発見があるんです。

女 ……はあ……？

澄子 教授が言ってたんです。この辺のごく近くに、まだ未発表の誰も知らない貴重な資料がある筈だって。どうしてもそれを今日中に調べあげなければ。

女 ……なにそれ。

澄子 とにかく行ってきます。

女 ふーん。じゃ、気をつけなさいね。この頃とんでもない天変地異で、地球や世界は、狂ってしまった。

今までの経験なんて、なんの役にも立たないの。

さつきちよつと庭先に出てみたけど、いつもの大晦日したら、寒すぎるわ。まるで凍ってしまいそう。いい？一歩外に出たら、何がおきてもおかしくないんだから。

澄子 有難うございます。じゃ。

澄子、出て行く。

女、見送ってー

女 おとといの夜。女学校時代の親友の八重子から、何十年ぶりに突然電話がかかってきた。ただただ驚き。八重子はちやつかり生きていた。お互い耳もすっかり遠くなり、認知症ぎみで話がスムーズに通じたとはいいがたかつたが。なんでも孫娘が大学院で国文学の研究論文を製作中でどうしてもうちの近くで調べたい事がある。それで二日だけ泊めてやってくれないかという。勿論即座に断る。

八重子是我的年を知ってて、一体なにを考えているんだろう。もう、八十五なのよ。

この年になると、毎日毎日、体のいたる所から痛みが噴き出てくるの。知らない他人に家にはいられるのがなに

よりも嫌なので、介護ヘルパーなどは断っているが、日々の暮らしは命がけの苦しみ。その上主婦にとって、一番忙しい大晦日に？泊まり客？非常識きわまりない。

それなのに・・・それなのに・・・夕べ遅くあの子はいけしゃあしゃあとやってきた。一体どういうつもりなんだろう。

そういえば生まれたての澄子を自慢げに抱きしめていた八重子も、記憶の中にないわけでもない。

八重子の話では、ひどい難病のアレルギーを患い、仕事も結婚もかなわず、ひたすら研究に没頭しているとの事だった。

来てしまった以上むげに断るわけにもいかない。

だいたい八重子は昔からすぐ勝手な所があつて私はいつも振り回されてばかりだったけれど。とにかく私は私でやる事をやらなくちゃ。今日は大晦日だ。

とうとう・・・大晦日に・・・なってしまった。

幸い今日は何故か腰も足もそんなに痛まないから、なんとかやれる所までやってみよう。

昨日までに終わったのは換気扇とガス台の掃除。勿論完璧ではないが。この際目をつぶるのだ。年賀状もやっと何枚かは書いた。筑前煮と昆布巻きはだいたい完了。

あとは仕込んである黒豆を完成させ・・・

そう・・・ローストビーフ・・・

一番大切なローストビーフ。

年が明けた瞬間に、シャンパンを開けて食べるのだ。

何十年も続けてきた恒例行事・・・

この間、死ぬ思いで築地のあの肉屋にでかけ材料は買ってきてある。地下鉄の入り口も、切符の買い方も別世界のように変わっていて、どんなに、どんなに難儀をしたことか。

でもどうしてもあの肉屋じゃなきゃ駄目なのだ。東京で私が一番おいしいと確信を持っているあの肉屋じゃなきゃ意味がない。

確かにあの肉屋の肉は恐ろしく高い。しかしその料金を払う時、血が薄まっていくようなすごい陶酔感があった。やはりたまにはお金は使ってみるものね。

焼き上がったばかりの血のしたたるローストビーフにたっぷりのホースラデッシュをつけてシャンパンと流しこむ瞬間！

新年が来たことがこんな私にも、喜べる筈。

こんな風に老いぼれてしまつて、生きているのか、死んでいるのか時々わからなくなる私にも……。

ああ、せめて……せめてその瞬間だけは……。

(気を失うように座り込んでしまう)

……だから……

どうしても……作らなくてはいけないのだ。……どうしても……

……(がつくりと肩をおとしてうめく) ああ……。

(と、本が落ちているのがふと目にとまる)

なあにこれ？

ああ、澄子が忘れていったのね。

……「私はこの女でござる」……あの子の研究してる作家。……

……久坂葉子……。

……ふ、懐かしい。

たしか大晦日に二十一歳で飛び込み自殺したのよね。私と同じ年だったから……(指で数えて)……八十五ひ

く……二十一は……六十、四?……六十四年も前の話。

……当時は大騒ぎだったな。私も八重子もかつこいい! っつてそりゃ憧れた

ものだけ……

でも今から思えば……なんて縁起の悪いはた迷惑な死に方だろう。

よりにもよつて大晦日を選んで電車で飛び込むなんて。

許せない。

二十一の小娘なんて所詮自分のことしか考えないのね。

……でも……

……本当はなんで死んだんだったっけ?

……死ぬぐらいだから、なんか理由があつたのよね……。……あれっ……。

……なんだっけ?

……なんだっけ?

……

……

……

この頃なにもかも忘れてしまう。  
・・・なにもかも・・・。

もう、いいわ！

もう、それどころじゃないんだから。

・・・そんなこと、・・・どうでもいいわ。

八十五ひく二十一・・・六十（指で数えて）・・・四年も前のことなんて。

・・・とにかく、作らなくちゃ・・・。

・・・ロースト・ビーフ・・・。

女の照明、溶暗していく。

スライドに光がはいる。

阪急急行列車の先頭。

疾走してせまってくる。

大音響でゴーツという音が聞こえる。

スライドの前に一人の若い女が後ろ向きで立つ。

毅然とした表情で胸をはって立っている。

ギリギリまで迫ってくる列車。

キキーツという急ブレーキの音。

その瞬間女がフワッと浮かびあがるように見えた。

女の声  
キヤーツ

女、ゆっくりと振り向く。

そして妖艶に微笑む。

## 1 父の部屋

スライドに文字が映る。

『昭和二十七年十二月三十一日

午前十時

葉子の父の部屋』

シャンソン響いてくる。

舞台溶明していく。

紬の丹前を着た父、籐椅子に座り、遠く目線を泳がせている。病疲れしたその表情。突然苦しげに激しく咳き込む。

しばらく咳が続く。

葉子が駆け込んでくる。

葉子 お父様、大丈夫！？

父の咳さらに激しくなる。

葉子、必死で父の背中をさする。

次第におさまっていく。

葉子ほっとしたように肩の力を抜く。

葉子 …… ああびつくりした。今すぐ美代にお菓を煎じさせます。

父 後でいい。そ、それより（ふと葉子を見て驚く）ど、どうしたんだ、その髪。

葉子 えっ。

父 どうしたんだ。その髪。

葉子 切ったんです。

父 何故？

葉子 今日は大晦日です。

今日でこの一年はおしまい。

明日からまた新しい一年がはじまるんです。

だからって。

父 そんなに、へんですか？

当たり前だ。鏡をみたのか。

葉子 別にいいじゃないですか。若白髪が増えちゃって、長い髪は面倒くさくてかなわないんです。

父 でも、それじゃ。

葉子 は？

父 ……それじゃ、まるで男じゃないか。

葉子 男？

父 うむ。

葉子 ふうん。もしできるなら、いつそそうなりたいわ。

葉子と父、じつと見詰め合う。

父 信一郎はどうした？

葉子 お兄様じゃないんです。夕べも帰ってこなかったみたい。

父 しょうがない奴だ。全く。

葉子 今夜は帰ってくるのかしらね。大晦日の今夜は。

父 何をやってるんだ。あいつは。長男なのに。

葉子 ……そうか、長男だから……。だから帰ってこれないんだ。

父 なに？

葉子 別にたいした事じゃありません。

父 生まれ方を間違えたんだ。葉子の方がよっぽど頼りになる。お前が男、信一郎が女だったら、この家も全然違っていたらうに。

葉子、チラッと父を見る。

父 お母様は？

葉子 相変わらず。一年の締めくくりとかいって又例の神様の所にお参りにいってます。美代も午後から実家に帰る  
つて。

父 そうか。

葉子 なんですか？私に用事って。

父 うむ。実は・・・これを青木の所に持って行って、金に換えてきてくれ。

父、桐の箱を葉子に渡す。

葉子、箱を開ける。

中から金の杯を取り出す。

葉子 菊の御紋。

父 お母様には絶対内緒だぞ。

葉子 これは。

父 うむ。

葉子 園遊会で陛下から賜ったもの。

父 かなりの金になる筈だ。

一割はお前にやろう。手数料だ。クリスマスプレゼントとお年玉、両方かねての小遣いだ。

葉子 これを？

父 大晦日だ。金がいる。

葉子 これを売るんですか？

父 ……そうだ。

葉子 ……そこまで……。

父 なんだ。

葉子 そこまで、家は困っているんですか？

父  
・・・

葉子  
・・・ねえ、お父様。

私たちこんな事してちゃいけないんじゃないかしら？

父  
どういう意味だ。

葉子  
お金は空から降ってきません。売り食いももう限界。坐って待っていても駄目なんだ。なにかなにかやらなければ。

父  
なにか。なにかってなんだ。

葉子  
たとえば・・・

父  
商売でもやれというのか。

葉子  
そう！そうです。

父（鼻で笑って）出来るもんか。

葉子  
どうして？

父  
商売人でもない我々が手を出したって結局損をしてしまうんだ。世の中はそんなに甘くない。世の中は恐ろしいところだ。お前にはまだそれが全くわかっていないんだ。

葉子  
だからって。

父  
我々みたいな種族が結局一番世間知らずなのさ。下手に動くとなんでもない事になる。

葉子  
だからって指をくわえてただ見てろっていうんですか。全く収入のない暮らし。売るものもつきはてたんです。

お父様、もしかしてこんな風になっても、人に頭をさげるのが嫌なの？

父  
馬鹿な。

葉子  
私があんなに勤めに出たいといったのに結局許してもらえない。

父  
今のお前にはなにもわからないんだ。困ったところなど少しでも見せてみる。銀行の信用も失ってしまうんだぞ。

葉子  
・・・お母様が昨夜・・・計算しながら言っていました。来年からは一日五十円でやらなくちゃ、生活していけないって。朝は番茶とパン。お昼は漬物と佃煮。夜は一日おきに蒲鉾とちくわ。

父  
・・・や、やめろ！

葉子  
蒲鉾とちくわ！

父（耳を押さえて）やめてくれ！

葉子 お父様。

父 く、くだらん事を。

葉子 だってこれが現実なんです。蒲鉾とちくわ。それがわからないんですか？この期に及んで。

父 ……。

葉子 飢え死にするおつもりですか？見栄、世間体、過去の誇り。そんなもののために、家族四人……。

父 ……。

葉子 ……この間、芦屋のもとの家の前を通りました。

父（血相を変えて）えっ！？本当か！

葉子 はい。

父 そ、それで？

葉子 何が？

父 変わっていたか？

葉子 中まで入ったわけではないけれど、表から見る限りでは全然。大門も門番小屋もそのまま。

父 ……そうか……手放してもう、三年か。

葉子 今から思えば、なんだか不思議な気がするわ。あの家での暮らし。すぐ近くにいくのもわざわざ自動車に乗り、

お兄様と運転手の横の席を奪いあったわ。いつもたくさんのお客様がみえたわね。

二階のお座敷には、大きな分厚いお座布団が並べられた。女中たちが白いエプロンを脱いで、黒塗りのお膳をまるで行進でもするように次々と運んでいく。床の間には山福の掛け軸がかけられ、あの大きな七宝焼きの壺

には、季節の花が見事に活けられる。ウサギの模様の大好きなお召しを着て、私もお客様にご挨拶をしたっけ。

お母様の華やいだ笑い声。お座敷の一番奥にすわってらしたお父様。誰よりもご立派で威厳のあったお父様。

父 ……。

葉子 そんな生活を恋しがったり、そんな生活を経験したと得意がる以上に、明日をも知れないこの運命が、私は怖

い。怖くてたまりません。

父 終わったんだ。

葉子 何がおわったんですか？

父 なにもかもさ。

葉子 なにもかも？

父 あの家を手放した時に。

終止符をうったのさ。

葉子 もう！いいかげんにしてください。

父 えっ。

葉子 どうしてお父様一人だけそんなふうになつて格好つけてるの。私たち三人は一体どうなるんですか？

父 えっ。

葉子 終止符なんかうてやしない。

私たちとりあえず生きていかなきゃいけないんですよ。

父 えっ。

そうです。

葉子 ・・・生きていく・・・・・？

父 当たり前です。生きていけないからって・・・・・すぐに、死ぬるんですか？

葉子 死ぬるんですか！？

葉子 死ぬるんですか！？

葉子、父に詰め寄っていく。

無言の父。

葉子、急にその場にへたりこむ。

音が聞こえる。

葉子の脳の中の音。

グシャッと何かがつぶれる音。

葉子 (呻く) ううう。

父 ・・・よ、葉子。

葉子 ううう。

父 葉子、どうしたんだ。

葉子 ・・・駄目だ。

父 えっ。

・ ・ ・ 駄目だ。私。

父 葉子。

・ ・ ・ 私、ちっともしつかりなんてしてません。

父 えっ。

葉子 この家で一番小さいのは、私なんです。

父 葉子。

一番助けてほしいのは、私じゃありませんか。

父 葉子 ・ ・ ・

そうでしょ？

父 ・ ・ ・ そうだったな。葉子。

葉子 もう、駄目だ。あそこに行く。

父 ・ ・ ・ 葉子。あそこって。

葉子 あそこ。

父 どこだ。

葉子 レール。

父 レール ・ ・ ・ ?

葉子 ・ ・ ・ レールのあるところ。

スライドが映る。

夜の六甲駅。

阪急急行列車の先頭。

ゴーっという音と共に疾走してくる。

葉子

・ ・ ・ 小さい子供の時から、そうだった。  
わたしが本当はいつも行きたいところ。

父 葉子！

葉子

毎日、毎日そう思う。

朝起きた時。午前中何もすることがない時。夕方の人ごみの中。

いつもまず砂みたいなのがグシヤグシヤたまってきた、それがすこしずつ広がって……。だんだん私を占領してしまう。そうすると、私は、

父

そうすると？

スライドの前に立つ葉子。

ギリギリまで迫ってくる列車。

キキーンという急ブレーキの音。

その瞬間葉子は、フワッと浮かんだように見えて倒れる。

父

葉子！

父、よろよろと立ち上がると葉子の手をとる。

気を失っている葉子。

父

……。そういえば、美代が最近お前の睡眠薬の量が増えたって。

葉子、葉子、しっかりしろ。

……。。

父

葉子！

激しく葉子の肩をゆする。

しばらくの間。

葉子、気がつく。

不思議そうに見回す。

葉子 お父様。

父 お前・・・神経衰弱じゃないのか？

葉子 ・・・・そうかもしれない。

父 なるべく早く早く医者に行くんだ。

葉子 はい。

父 わかったな。

葉子 わかりました。

葉子の表情、落ち着いてくる。

葉子 ごめんなさい。

父 うむ。

葉子 最近原稿が書けなくて、この頃少しおかしいんです。

父 うむ。

葉子 へんな心配しないで。

父 わかっている。

葉子 ねえ、お父様。

父 やり直しましょうよ。

父 ・・・・

葉子 一からやり直しましょう。

父 家族四人力をあわせて。

父 そうだな。

葉子 出来る筈だわ。私たちなら。

父 本来にこのままじゃ強盗か首吊りだな。

葉子 昔の何不自由ない暮らし。でもそれが本当に素晴らしい生活だったんでしようか？

父 何不自由ないってことは、もしかしたら、一番不自由なことかもしれない。

葉子 あんな大きなお屋敷今考えれば面倒くさいだけだわ。

父 ……

葉子 やっぱり売ってしましましょう。この杯。美代にも暇をとらせて。家族四人心をひとつにして、地に足をつけて。

父 わかつてる。

葉子 そうそう、昨日新聞社の人から電話があつたのよ。芥川賞最年少候補って、それなりに話題になるのね。賞はとれなかつたのに、私の小説を連載したいんですって。

そもそも芦屋のもと令嬢が落ちぶれはて貧乏暮らしをしてるのは、それだけで人の興味をそそののね。

お父様。これからは私がうんとお金を稼ぐわ。そしてこの家を盛りたててみせる。

お父様はまず病気を治すことに専念して。

そういえばこの間は私のラジオドラマがはじめて放送されたのよ。

すごいと思わない？

私の書いたドラマが電波に乗って全国中に放送されたのよ。

……聞いたよ。

葉子 えっ。

葉子驚いて父をまじまじと見つめる。

葉子 ……今なんていったの？

父 聞かせてもらったよ。

葉子 う、嘘！

父 本当さ。

葉子 誰にも内緒にしてたのに。

父 聞かれちゃ困るからだろう。

葉子 ……

父 あのラジオドラマ、全くこの家そのものじゃないか。

病気で昔の栄華を懐かしむしか能のない父親。新興宗教に走る母親。落伍者の兄。フラフラとした自分を定め

る事のできないアプレゲールの主人公。

・・・。

父 父親は最後、病死とも自殺ともつかない妙な死に方をする。  
「いつまでの吾が命かな蛍とぶ」そんな辞世の句を残してな。

葉子 お父様。

父 あの俳句はこの間私が書いたものだ。

・・・。

父 私の文机からお前は盗んでいったんだ。

葉子 ごめんなさい。

・・・。

葉子 私、お父様の事なんて非難できませんね。私もお父様と同じ。お父様が昔の良かった暮らしの時のものを一つ一つ売って生活していくように、私もこの私生活をギリギリまでさらけだして切り売りしなければ、作品なんてかけないんです。

・・・。

父 自分の体験のない喜びや苦しみを書いたり、今まで人が見た事もない新しい世界を作り上げたり。

葉子 そんな事私にはできないんです。

この頃やっとそれがわかりました。

恥ずかしい思いをして、裸になって、自分の事を露出して・・・。

それでやっと、書ける。

構わないじゃないか。

えっ。

父 書けよ。そんなものでよかつたら、徹底的に書けよ。こんな我が家の窮状でよければ。

・・・。

父 なかなか聞かせるドラマだった。この頃にしちゃ珍しい。あのドラマに描かれているのは、歴史のある家。祖に偉い人がいる家。そして何かが大きく間違ってしまった、今はただ淀んでいるだけの家。

・・・お父様。

父 お前が世間で少しづつ注目されるのもわかるような気がしたよ。

葉子 やめて下さい。

父 書けよ。思う存分。

葉子 家の恥をさらすんです。お父様が一番嫌がっていること。

父 構わないさ。でもそれは勇気のある事だ。誰にでも出来る訳じゃない。

この家でそれが出来るのは、多分お前だけだな。

お父様。

シャンソン聞こえてくる。

父 でも・・・でも、もしもこの家がお前にそんなに重いなら、お前この家を捨てて遠くに行ってもいいんだぞ。

葉子 それを売った金でな。

葉子 ・・・・遠く？

父 そう、遠く。

葉子 ・・・・遠くって、どこ？

父 どこでもいい。お前の好きなどころさ。

葉子 私の好きなどころ？

父 そうさ。

葉子 本当に行っているの。

父 うむ。

葉子 ・・・・無理です。

父 えっ。

葉子 きつとどんなに遠くへ行つたつて、お父様の咳の音が聞こえてきて私は心配でたまらなくなる。

父 お前だけはこの家の犠牲になつちやいけない。

葉子 家を捨てられるわけない。

父 絶対にそんなこと、できません。

ここで滅んでいくのは私とお母様、信一郎の三人で充分だ。

葉子 お父様。

父 葉子だけはどこか遠くに。

私達家族が誰も行ったことのない所に。

葉子 ・・・・まだ誰も行ったことのない所？

父 そうだ。

葉子 誰も行ったことがない所・・・。

父、激しく咳き込み始める。

葉子、急いで背中をさする。

葉子 お父様、大丈夫？

誰か来て！美代！美代！

シャンソン鳴り止む。

葉子と父の照明消える。

上手にスポット。

駅員2がいる。

本を読んでいる。

駅員2 「・・・結末のないお芝居の幕がおりようとした。その幕がおりきらないうちに観客は欠伸をして立ち上がった。幕は中途半端なところで中ぶらりん

揺れていた・・・」

読んでいた本を閉じ、見つめる。

顔をあげてしばらく宙を見つめている。

駅員1が登場。

駅員1 処理完了しました。

駅員2 運行再開したんだな

駅員1 一応。

147分遅れで運行再開です。

まだすごい混乱です。

人身事故が四つも重なったんです。

それも大晦日に。

首都圏のダイヤはめちゃくちゃです。

駅員2  
・・・そうか。

駅員1 主任・・・本、を読んでいるんですか？

駅員2 ふっ・・・珍しいだろう。

駅員1 ええ、はじめて見ました。

駅員2 俺だって本くらい読むよ。

駅員1 はあ。

駅員2 ……この女の作家、大晦日に電車で飛び込んで、自殺したらしい。

駅員1 えっ。

駅員2 まあ、昔の話だけどさ。

駅員2、駅員1に本を渡す。

駅員1 「・・・久坂葉子『灰色の記憶』・・・」

しばらく本をパラパラとめくって。

駅員1 そうだ。

封筒を出す。

駅員 1 特別手当てだそうです。

駅員 2 (封筒を見つめて)・・・呑むか？

駅員 1 ・・・ええ。

駅員のスポット、消える。

下手のスポットがつく。

台所に女がいる。

傍らに鍋がある。

鍋がふきこぼれる。

はつとする女。

女 黒豆も煮よう。

三日前に仕込んでおいてある。

これもまた毎年繰り返される主婦の私の恒例行事。

まず深鍋に、錆び釘を入れた調味液に一晩浸した豆を入れ軽く煮立ててアクをとる。

木の落とし蓋をして、さらに鍋蓋もしっかりして、ここから七、八時間コトコト煮続ける。火にかけた鍋はしんと静まりかえっている。

耳をすませばかろうじて豆が小さくゆれる気配がするだけ。つつい蓋をあけたくなるが、それは絶対にダメ。

煮汁が少しでも蒸発すれば、皮が空気に触れて、豆は途端しぼんでしまうんだ。消えるか消えないかの弱火でじれったさにひたすら耐える。

煮あがりの目安は一粒を縦につまんで皮がやぶけて中から飛び出すようならまだまだ。破れずにやんわりとしたらその時こそ出来上がり。完全に冷めるまで蓋はそのまま。

数時間後にそろりと開けると黒豆は煮汁の中で美しく、漆黒に輝くー。

新年を迎える瞬間まであと十数時間。

なにかが・・・なにかが・・・

それは、なに？ 私・・・何か一番大事なことをすっかり忘れてしまったような気がする。

それはなに？

どうしても思い出せない。

ああ、いやだ。

年はとりたくないものだ。

胸が・・・胸が・・・苦しい・・・。

女、胸をかき抱く。

そしてスポット消える。

## 2 島尾の家

スライドに文字が映る。

『昭和二十七年十二月三十一日、

午後一時

葉子の文学の師、島尾敏雄宅』

シャンソン続いている。

葉子が一人坐っている。

膝の上の鞆の中から、新聞紙に包んだ札束を取り出す。

小さな贈り物の包みも取り出す。

二つを並べて、じっと見つめている。

島尾の声　く、久坂君。

葉子、あわてて鞆にしまいこむ。  
シャンソン鳴り止む。

島尾登場する。

唐突な印象の真っ赤なカーディガンを着ている。  
眼鏡をかけ、神経質そうな風貌。

島尾　久坂君。待たせてすま・・・。  
葉子　先生。

島尾　（同時）どうしたんだ！その髪！

葉子　（同時）どうしたんですか！そのカーディガン！

島尾　えっ！

葉子　えっ！

お互いをじつと見る。  
しばらくの間。

島尾　随分思いきりましたね。

葉子　はあ・・・。

へんでしょうか？

島尾　いや。でもちよつとびっくりした。

葉子　先生、今日は大晦日です。一年最後の日です。今年の事は今日中に決着つけるべきです。

島尾　だから、髪を？

葉子　はい。

島尾　なるほど。

葉子 今度こそ。

島尾 えっ。

葉子 今度こそ、新しい、自分に。

島尾 ・・・君は・・面白い人だ。

葉子 ・・・

島尾 ・・・このカーディガンそんなにおかしいですか？

葉子 ・・・いい、いえ。ただ。

島尾 ただ？

葉子 先生は時々、全然自分に不似合いなものを、着てらしたり、持ってらしたりすることがあります。本当に時々ですが。

島尾 ・・・気をつけよう。

久坂君がそういうのだから。

それで、今日は？

葉子 すみません。大晦日なのに急に押しかけてしまつて。

島尾 ・・・まあ、ちょうど・・、良かったといえはいえないこともない。

葉子 えっ？

島尾 年が明けたらすぐにでも久坂君に送ろうと思っていました。

島尾、部屋のすみから一冊の本を持ってくる。

島尾 出来上がりました。君のはじめての本だ。

島尾、葉子に本を渡す。

手に取り、怖いものでも見るように

じっと見つめる葉子。

島尾 どうですか？

葉子  
・・・。

島尾  
かなりうまく出来上がりました。

葉子  
・・・。

島尾  
装丁もなかなか、いい。

葉子  
・・・。

島尾  
題も衝撃的だ。

葉子  
・・・。「私はこんな女でござる」……。

島尾  
史上最年少芥川賞候補者の本だ。きっと話題を呼ぶ。この本は多分売れる。

葉子  
・・・。「私はこんな女でござる」……。

島尾  
わが同人誌「バイキング」からはじめて女流新人作家が誕生したんだ。

「バイキング」一月の例会は、新年会と、久坂君の出版記念会をかねて、今までになく盛大にやると富士君が  
はりきってました。

葉子  
・・・。

島尾  
どうしたんですか？

葉子  
はあ。

島尾  
なにか不満でも？

葉子  
・・・。

島尾  
ちつとも嬉しそうじゃないね。

葉子  
皮肉なものです。

島尾  
私は今日先生に。

島尾  
先生に大事なお話があつてきました。

葉子  
大事な話？

島尾  
はい。

島尾  
どうしたんですか？ずいぶん思いつめてる。

葉子  
そうだ。忘れてた。その前にこれを。

葉子、鞆の中から、贈り物を取り出すと、島尾に差し出す。

葉子 先生、これ。  
島尾 (怪訝に) なんですか。一体。

葉子 贈り物です。  
島尾 贈り物？

葉子 本当はクリスマスにプレゼントがしたかったんです。でも私その時お小遣いがなくて。  
今日私少しお金持ちなんです。だから先生に。  
前から先生にこれを差し上げたいと思っていました。

葉子、包みを開いて、青磁の小さな香炉を取り出す。

葉子 これです。

島尾 これは。

葉子 いいでしょ？

すごくいい香炉でしょ？

島尾 これは・・・。

葉子 前から憧れていたんです。何度も何度も、お店に見にいつて。まだ売れてないって安心して帰ってきて。  
今日は大晦日だから、もしお店がしまっていたら、どうしようかと思った。

島尾 これは・・・。

気に入ってくださいましたよね。先生。

葉子 先生がこういうものに目利きだつてことは、私ちゃんとわかってました。そうでしょ。先生。  
これは・・・。素晴らしいものだ。(手にとって) これは、なかなか。

島尾 私が好きなものは、絶対先生もお好きな筈だという、自信がありました。

島尾 (見惚れて) うーむ。

葉子 気に入ってくださいましたね。

やっぱりと先生は同じものに心が惹かれるんだわ。

島尾 (ハッとわれにかえる) いや、とんでもない。こんな高価なもの、貰うわけにいかない。

葉子 いいんです。さつきもいったでしょ。

私今日だけはお金持ちなんです。

島尾 だからってこんなもの、久坂君に貰う筋合いないじゃないですか。

葉子 先生。

もし、できたら・・・。

この香炉にお線香を、一本立てて。

島尾 えっ。

葉子 もし、できたら・・・。

一緒にお葬式をしてください。

島尾 えっ。

葉子 そうだわ。

ブラームスの四番をかけてくださったら最高だわ。

先生のお宅にレコードありますか？

島尾 葬式？

はい。

島尾 一体、誰の？

葉子 小説家、久坂葉子。

島尾 どういうことですか？

葉子 小説家の私のお葬式です。

島尾 意味がわからない。

葉子 先生。

私もう小説を書くの、やめようと思つてます。

だから、髪を切つたんです。

島尾 久坂君。

葉子 先生。一緒にお葬式をして下さい。

それも今年中に。つまり今日中に。

島尾 どうしたんですか。一体。

葉子 もう、決めました。  
島尾 何があつたんですか？  
葉子 だつて・・・。  
島尾 書けないんです。  
葉子 書けない？  
島尾 はい、書けません。  
葉子 書けない・・・。  
島尾 一行も一字も、もう書けません。  
葉子 「バイキング」春の号の原稿もとうとう、間にあいませんでした。  
島尾 えつ。あの「孕む」ですか？  
葉子 はい。  
島尾 (がっかりして) そうですね・・・。  
葉子 すみません。  
島尾 出だしはあんなに良かったのに。  
葉子 駄目です。  
島尾 書けません。  
葉子 ・・・・。  
島尾 ・・・・。  
葉子 ・・・・それなら仕方ない。  
島尾 次の号にまわしましょう。  
葉子 駄目です。  
島尾 えつ。  
葉子 書けないんです！  
島尾 えつ。  
葉子 書けないっていつてるでしょう！  
島尾 ・・・・久坂君。  
葉子 (大声で) もう、書けないんです！

島尾  
久坂君。

葉子、突然髪をかきむしる。  
呆然と見ている島尾。  
しばらくの間。

葉子（部屋をゆっくり見渡して）この部屋だ。

・・・あの日。

島尾  
えっ。

葉子  
・・・あの日、雨が降ってた。

島尾  
えっ。

三年前、私がお部屋に伺ったあの日。生まれてはじめて書いた三十枚の原稿を握りしめて。

ああ。

葉子  
先生はずっと黙っていらした。

ずっと黙っていらした。

先生が原稿を読んでいらつしやる間私はずっと緊張して、膝の上のハンドバックをガシャンと二回も音を立てて落とした。

でも先生は目もくれずに黙って原稿を読んでいらした。

私の胸の動悸は、先生に筒抜けに聞こえているのではないかと思うほど、大きく、早くひびいていました。長い長い時間。

一体どれくらいの時間がたったのか？

先生はやつとお顔をあげられて

「うん」納得したように頷いてくださった。

今でもはつきり耳に残っています。

「うん」

島尾  
・・・もう、三年もたったんですか。

葉子

あの瞬間です。

あの瞬間に、私はもしかしたら、今までと違う何かに。

今まで知らなかった高みに先生が誘いあげてくれたと思いました。

島尾

いい原稿でしたね。

君にはすごい素質があると僕は直感した。

でもそれは先生の単なる錯覚だったんです。

葉子

えっ？

島尾

・・・先生は私を「バイキング」にも紹介してくださいました。

まるで、夢のような時間が私に訪れた。

私の胸は躍りました。

小説が書ける。

もしかしたら、小説家になれるかもしれない。

私は小説で本当の女を書こうと思った。

だって今まで小説に出てくる女はたいして本当の女とは全然違っていたか

ら。女をあらゆる角度から解剖して、小説にしてやろうと意気込んでいました。

島尾

君ならきつとできるでしょう。

葉子

そうでしょうか？

島尾

現に君は「ドミノのお告げ」で史上最年少芥川賞候補者になったんです。

葉子

私、あの作品は好きじゃなかった。

島尾

・・・書き直させた事を怒っているのですか。

葉子

あの作品は本当に私の作品でしょうか？私をはじめに書いたものとは全然違うものに直して、直して、直して。先生と編集者のいうとう

あれはもう二人の作品だわ。

島尾

君が最初に書いてきたものは、とても小説とはいえない。

葉子

いわば小娘の身辺雑記。ただのひとりよがりの綴り方だ。

葉子

でもあれが私の世界だったんです。

葉子

あれこそが。

島のいい事だったんです。

島尾 久坂君。

先生と編集者のいう通りに直していくと何故か私の小説は太宰治そっくりになりました。同じ没落貴族という境遇を利用して、先生は私を「女太宰」として売り出そうとしたんです。

島尾 まさか。

じゃ、何故書き直しを？

島尾 他人になにかを発信するには、あるプロセスが必要なんです。一体どうすれば、他人に伝わっていくのか。

葉子 他人？

島尾 他人ですよ。あかの他人。

何万、何十万人の。

葉子 何故ですか？

島尾 それが表現するということだ。

小説を書くという事だ。

葉子 不思議な考え方。

島尾 えっ。

葉子 何十万人の他人なんてどうでもいいわ。

私は自分の為に小説を書きたかった。

そして・・・先生のために。

島尾 ・・・・それは多分間違っています。

葉子 よくわかりません。

わかりたくもないわ。

島尾 久坂君。

とにかく私は芥川賞の候補者になって色々な人に注目されました。

すると何故か小説を書くことがただ辛いだけになってきました。はじめはあんなに楽しかったことが。

苦しいのはあたりまえじゃないですか。

葉子 そうかもしれません。

でも、私は嫌です。真っ平です。

島尾  
葉子

久坂君。

・・・だつて、書けない。

全然書けないんです。

皆が期待してくれている。

今度こそ本気でやろうと思いました。

毎日毎日必死で机に向かいました。

八時間、九時間、十時間。

でも一行も、それどころか、一字も書く事はできませんでした。

出てきたものは、脂汗だけです。

だからなんだ？

島尾  
葉子

今度こそ、はっきりわかりました。

私は書く事なんて出来ないのです。

小説家なんかになれる人間じゃない。

甘ったれんな。

島尾  
葉子

えっ。

少しぐらい話題になったからっていい気になるな。

島尾  
葉子

えっ。

皆とりあえず芥川賞候補になるまで、どれほど苦労してるのか知っているのか。

島尾  
葉子

芥川賞なんてどうでもいい。

先生。

島尾  
葉子

今日こそ今まで聞きたかった事を伺います。

えっ。

島尾  
葉子

えっ。

どうお考えですか、先生。

島尾  
葉子

本当に本当のところ、私はものを書ける人間ですか？

・・・

今日こそ真実をおっしゃって下さい。

もし私が没落貴族の娘じゃなくても、

芥川賞最年少候補の若さがなくても、私に書くべきものがありますか。

葉子、島尾の前にたちはだかる。

葉子 本当に書くべきものが私にありますか。

葉子、尚も島尾に近寄っていく。  
圧倒される島尾。

葉子 先生、私を見て下さい。

目をそらさないで。

・・・。

島尾 私は何を書けばいいのですか？

私に書く資格があるんでしょうか？

教えて下さい。

本当のことを！

・・・。

島尾 先生！

・・・君はいくつですか？

二十一です。

葉子 二十一で何がわかる。

島尾 ・・・皆がそういう。

その年で書けないなどと全くナンセンスだと。

でも多分若いからこそ、なにも知らない苦しみで、わたしはのたうち回ってしまふ。

先生。

もう一回だけ聞きます。私に。

私に、書くべきものがありますか？

ここまでの苦しみを乗り越えても、尚。

島尾

葉子

先生！

島尾

あると思う。

葉子

それは！？

それは、なんででしょうか！？

島尾

君は、女性でありながら、しかもその若さで、自分の病状を正確に自覚して、勇気を持って報告しよう

葉子

としている。今の日本にそんな少女はおそらく君以外にいないだろう。

島尾

それが、君の文学者たる証拠だ。

葉子

・・・何いつてるのか、わかりません。

島尾

久坂君。

葉子

ううう。

島尾

久坂君。

葉子

ううう。

島尾

どうしたんだ。

葉子

もう駄目だよ。

島尾

行きたいよ。

葉子

どこへ？

一体どこへ行きたいんだ。

・・・レール。

島尾 レール？  
葉子 レールのある所。

島尾 ・ ・ ・ 阪急 ・ ・ ・ 六甲駅。  
葉子 何故だ。  
死ぬために。

スライドが映る。

夜の六甲駅。

阪急急行列車の先頭。

「ゴーっ」という音と共に疾走してくる。

葉子 あそこで列車に飛び込むんだ。

島尾 久坂君！

葉子 先生、何故六甲駅か知ってる？

島尾 久坂君、しっかりしろ。

葉子 一番はじめの「バイキング」の例会の時、あそこで先生と待ち合わせしたよね。私が遅れて走っていくと、先生はコートのポケットに手をつっこんで、壁にもたれてひとりぼつんと立ってた。黒ぶちの眼鏡をかけて、口ひげがぬれていて。

先生の周りを透明で寂しい空気がおおっていた。

その真ん中で先生は、まるでこの世で一番弱い小動物みたいに目をキョトキョトさせてた。あんなにかわいそうで、可愛くて、いじらしいものを、私は生まれてはじめて見ました。

私は胸をいぬかれました。

先生はさみしいのだ。

たったのひとりぼっちなのだ。

私と同じなのだ。

先生の眼の奥の燃える孤独に、私はたちまち感染した。

・ ・ ・ ・ 私はある瞬間に先生に恋をした。

・・だから・・だから・・阪急六甲駅が世界で一番好きな場所。  
死ぬなら、死ぬなら、あそこって、決めています。

島尾

どうしたんだ。

頭がおかしくなったのか？

葉子

おかしいのは、先生の方。

そんな趣味の悪いカーディガンなんか着ちゃって。

先生こそ自分の事わかってない。

この香炉を見て。

真剣に見て。

心がうずくでしょ？

この香炉の素晴らしさがわかるのは、私と先生だけなんだ。

島尾

久坂君。

葉子

先生と私は同じことを考えてる。

同じことを感じてる。

この香炉がなによりの証拠でしょ？

先生、もうごまかさないでください。

島尾

久坂君。

先生、私と一緒に死んでください。

島尾

久坂君！

葉子、いきなり島尾に抱きつく。

葉子

先生、私を抱いてください！

島尾

な、なにをするんだ。

島尾、葉子の体をふりほどこうとする。

しかし必死でしがみつく葉子。

葉子 先生、キスしてください！

島尾 やめろ！

葉子 私と寝てください。

そして死んでください！

二人、格闘技のごとく絡み合う。

瞬間唇が接触してしまう。そのままストップモーション。

スライドの列車ギリギリまで迫ってくる。

キキーンという急ブレーキの音。

その瞬間、二人はフワッと浮かびあがるように見える。

島尾（叫ぶ） いいかげんにしろ！

島尾、渾身の力で葉子を投げ倒す。

大きい音がして葉子、床に投げだされる。

しばらくの間。

ゆっくりと起き上がる葉子。

形相はもとに戻っている。

葉子 ……先生……。

島尾 ……（肩で息をしている） うむ。

葉子 す、すみませんでした。

島尾 驚いた。

葉子 本当に、失礼なことを。

島尾 書くことは苦しい。それはわかる。

少し休んだらどうですか？

葉子 ……そうですね。

島尾 君には時間がうんとあるのです。

今の君には、わからないでしょうが。

葉子 はあ。

島尾 ラジオドラマの台本なんてやめたほうがいいんじゃないですか。生活が荒れていくだけです。

葉子 はい。

その時、声が聞こえてくる。

澄み切った声が。

声 おとうさあーん。おとうさあーん。

葉子 あっ。

島尾 あっ。

二人、顔を見交わす。

島尾の妻ミホ登場する。

若く美しく、生命力が溢れているが、少し狂気も感じさせる。

ミホ おとうさん、できました！

島尾 えっ！？

な、なにが？

ミホ おぜんざいよ。おとうさんの大好物。

明日はお正月だから、私朝から一生懸命作っていたの。

島尾 ああ。

ミホ ちょうど良かったわ。

葉子さんも来て下さって。

ねえ、食べてみて。

葉子  
・・・は、はい。

島尾  
・・・そうだな。

久坂君。是非食べて下さい。

葉子  
・・・はあ。

島尾  
小豆は神経に効くといひます。

葉子  
・・・。

島尾  
・・・かなり混乱しているようだから。

葉子  
・・・。

ミホ  
あら、葉子さん、どこかお悪いの？

葉子  
そんな風に見えないけど。

葉子  
いえ、別に。

島尾  
さあ、食べてください。

遠慮せずに。

葉子、つかれたように食べ始める。

島尾  
・・・どうですか？

葉子  
・・・おいしい。

ミホ  
うわー、よかった！

葉子  
すごく・・・甘いですね。

島尾  
うむ。

葉子  
いい・・・奥様ですね。

ミホ  
やだ、葉子さんたら。

やだあ！

葉子  
・・・。

ミホ  
ねえねえ、葉子さん。お父さんのカーディガン、どう？

葉子 えっ。

ミホ パリで一番流行ってるデザインですって。毎日夜なべして編んでたの。お正月に間に合わせようと思ってね。ねえ、おとうさん。

島尾 ・・・・うん。

葉子 ・・・・そうだったんですか？

島尾 まあ。

葉子 ・・・・申し訳ありませんでした。

ミホ ・・・・えっ？

島尾 久坂君、焦ることはない。

葉子 ・・・・

島尾 僕が知っている女の人で、白髪が生えてから書きはじめた人もいます。

葉子 ・・・・

島尾 久坂君も。

葉子 はい。

島尾 たとえば、たとえばだよ。

もし気のあう人がいたら、結婚でもして生活を立て直してからまた書き始めるのもいいんじゃないですか。

葉子 ・・・・結婚？

島尾 うん。

葉子 結婚・・・

ミホ 結婚・・・

そうよ。葉子さん。

結婚すればいいのよ。

葉子 はあ。

ミホ 女はやっぱり結婚しなきゃ駄目だわ。

葉子 ・・・・そうですね・・・そうかもしれません。

島尾 そうだな。

葉子 そうして・・・みようかな？

ミホ 是非！

是非そうなさって。

島尾 ……。

葉子 ……はい、考えてみます。

島尾 とにかく明日からまた、新しい年が始まる。

新しい希望をもちましょう。

お互いに。

葉子 ……。

シャンソン、聞こえてくるー。

島尾 来年、また遊びに来て下さい。

葉子 ……来年……？

島尾 そうだ。来年。

ミホ 来年！

葉子 は、はい。

ミホ 残さずに、全部食べてって。

葉子 葉子さん。

葉子 いただきます。

葉子 すごく……おいしいです。

島尾、ゆっくりと後退していく。

ミホと葉子ふたり残される。

ミホ 昭和十九年、主人島尾敏雄は、海軍震洋特攻隊の隊長として、私の住む奄美群島加計呂麻島に赴任してきました。青年将校、島尾の白き海軍の正装姿のなんとりりしかった事。島の人らは「隊長様」と熱狂的に歓迎しま

した。島の王室の家系にあった私と島尾は初めて会ったその瞬間から恋に落ちたのです。島の夜の浜辺での毎晩の逢瀬。手さえ触れあう事もなく、ただお互いの呼吸を感じながら、波の音に聞き入っている・・・私は主人に「隊長様」よりも「神」を感じていました。そして敗戦・・・島の王女後継者の将来を捨て、私は島尾と晴れて結婚したのです。この神戸の地に移り住み、主人は執筆に、私は子供と主人の世話にあけくれる日々。これ以上ないような幸せな日々。だって私はそう、神に仕えているんですもの。島尾には一番恰好の良いものを着せたいと、日本ではまだ売っていない型紙をフランスから取り寄せます。島尾が病気をしないように、滋養のある食べ物を料理します。親子の縁は一世、夫婦の縁は二世といえます。なんと深い絆でしょう。この絆の不可思議さにただただ感謝をせずにはいられません。

ミホ、葉子を挑戦的に見る。  
葉子、たじろぐように、去る。

シャンソン高まっていく。  
舞台溶暗していく。

同時に上手のスポットあたる。

駅員1・2・3がいる。

駅員2が本を読んでいる。

## 駅員2

「りんごをかじりながらさむいみちをあるいた。  
ゆうひがまっかになつてしずむ。  
きょうもいちにち、  
のぞみもわかず、ちからもわかず、  
ただ、さみしきでいっぱいになつて、  
なにがそんなにさみしいのかわからぬままに。  
まちかどにひがついた。  
あたらしいとしがもうやってくるというのに。」

あすさえもおそろしい。」(久坂葉子「りんご」)

駅員1、駅員2、二人聞き入っている。  
しばらくの間――

駅員2 君たち、一流大学卒業して、君は大学院まで出てるんだらう。

なんで、こんなしがない電鉄会社になんか、就職したんだ？

駅員3 私はずっと日本とアジアの交通網について研究してきたんです。

今は現場で修業しますが、いずれは又研究職に戻ることがきまっていますから。

駅員2 ……それで平気なのか？

……遺体処理までやらされて。

駅員3 ……平気とはいいませんが。

ある確率で、人間が鉄道に飛び込んで自殺をはかるのは、もう実証済みですから。

駅員2 へえ。

駅員1 僕は小さい頃から電車が一番好きでした。

毎日毎家の近くの踏切で電車を眺めていました。

電車は僕にとって希望の象徴でした。

たくさんの方がそれぞれの目的にあわせて、移動していく。あの箱に、何人もの人の人生が詰め込まれてい

る。皆がここよりほかの場所に、行くために。

駅員2 ふん……その希望の箱に飛び込んで、生命を絶つ人が、後をたたない。

駅員1 ……。

駅員3 主任。今日は大晦日で終夜運転です。

その人員配置について、打合せしたいのですが。

駅員1・2 ……。

しばらくの間――。

駅員3 主任！

駅員2 (はっとして) あ、了解。

駅員2、3、退場していく。

駅員1、それを見送ってー。

駅員1 . . . . .ここよりほかの場所 . . . . .

. . . . .自傷 . . . . .過食嘔吐 . . . . .過呼吸 . . . . .過敏性腸炎 . . . . .つきまとい . . . . .ひきこもり . . . . .

子殺し . . . . .

親殺し . . . . .

首吊り . . . . .練炭 . . . . .リストカット . . . . .一酸化中毒 . . . . .薬物摂取 . . . . .

飛び降り . . . . .自爆焼身 . . . . .

飛び込み！ . . . . .飛び込み！ . . . . .飛び込み！ (耳を抑える)

駅員1のスポット消える。

下手のスポットがつく。

女やはり台所にいる。

鍋の蓋をとり、満足げな表情。

女 澄ちゃんはまだ帰ってこない。

ニュースで同時多発的に人身事故が重なり首都圏の電車がとまっていると聞いていたから、それに巻き込まれてしまっているのか。

筑前煮の味見してみると、生涯で一番とっていいくらい、おいしくできていた。  
牛蒡。人参。蒟蒻。しいたけ。鶏肉。

里芋。蓮根。さやえんどう。

何種類かの素材がそれぞれに主張し、なおかつ調和し、かもしだすなんともいえないこの味。今日ならではの匂い。

ああ、何故だろう。

年の暮れは、特に大晦日はわくわくする。

料理がひとつずつ出来上がっていく。

掃除もだんだん終わってくる。

何かが完璧に完成していくこの感じ。

アドレナリンが全開で放出されていく。

たまらない充実感。

ほかでは味わえない達成感。

それをかなえてくれるのは……。

そうさ。

それは勿論大晦日の夜だ。

退屈きわまりないお正月は大きらいだ。

この夜。

そう簡単に新年になってたまるかという意志がザワザワと音をたてる。

過去と今のせめぎあい、頂点に達する時だから妙に胸騒ぎがするー。

……この夜だ。

この夜に……何かが……

何かが、起きる……！

スポット消える。

### 3 連れ込み宿

スライドに文字が映る。

「昭和二十七年十二月三十一日

午後五時

連れ込み宿」

そこは連れ込み宿の一室。

中央に布団が一組ひいてある。

だらしなく寝そべっている晴彦。

旅館の浴衣を着ている。

布団の上、膝をかかえ、煙草をすっている葉子。同じ浴衣姿。

情事がおわった後。

晴彦

全く何通電報がきたんやろ。「アイタシ」「アイタシ」「アイタシ」。こっちは大みそかで、餅代の工面であッブアッブしてる時に。

再びのように、葉子をかき抱く。

葉子も愛しげに晴彦の頭をなでる。

激しい抱擁しばらく続いて。

晴彦

びつくりしたわ。その髪。なんでそんなおかしげな髪にしてしもたん。前のたつぷりしたのが俺大好きやったのに。

葉子

これでいいのよ。スッキリしたわ。

晴彦

まあ、それはそれで見ようによつては格好いいかもしれへんな。いずれにしてもこっちが驚くような事平気でやる女やもんな。

葉子

ふん。

シャンソン鳴り止む。

晴彦も煙草を吸いだす。

晴彦 一年も終わりか。

あつという間やな。

葉子 本当ね。

明日から・・・。

晴彦 また新しい一年が始まる。

都合よくできてるもんや。

今年一年いろんな事があつて、嫌な事も多かつたけど、なんとなくチャラになるような気がする。明日からまた真つ白な気持ちではじめればいいんやもんな。

葉子 最近劇団の方はどうなの？

なかなかうまくいかんのや。演出家の奴、俺のいいところ、ちつともわからうとしないんや。ま、この間はあんたのお陰でラジオドラマの役につけてもらったけどな。

葉子 私の兄の役ね。

晴彦 どうやった。聞いてみて。

作者の先生といたしましては。

葉子 やめてよ。そんな言い方。

晴彦 だって本当の事やないか。

あんたは作家の先生。

葉子 俺は劇団の中でも一番ペエペエの駆け出しの俳優。

晴彦 先生なんて。

年は同じなのにえらい違いや。

俺たちがつきあつてること知つたら、皆なんていうやろか。

葉子 ・・・・。

それでどやった。ラジオドラマの俺。

葉子 うん、なかなかよかつたわ。

晴彦 ほんま？

葉子 いい声だわ。晴彦。

晴彦 あのラジオドラマ・・・。あんたの家のことそのまま書いたんか？

葉子 まあね。

晴彦 たいへんなんやな。ええ家はええ家で。

葉子 アホなのよ。時代がどんどん変わってるのにそれに気づきもしないで、置いてきぼりにされて。滅び行く人種よ。

晴彦 ふーん、まるで。

葉子 えっ。

晴彦 まるで、太宰治みたいやな。

葉子、不愉快そうに晴彦を見る。

晴彦 まあどこかで多少は大変なんや。

家も親一人子一人でそれなりにしんどいわ。俺が俳優として、もう少し望みが出てくれば又違うんやろうけどな。

あつ、そうや。演出家が今度はあんたに戯曲を頼みたいって。

葉子 戯曲？

晴彦 今度の新人公演にむけて何か書いてほしいって。いいの書いてや。俺が主役の。な、先生。

葉子 ……

葉子、立ち上がる。

部屋のすみの鞆から、新聞包みを持ってくる。

葉子 晴彦、これ。

新聞包みを開ける。

中から出てくる札束。

葉子 これ、見て。

晴彦 (驚いて) どうしたんや。そんな金。

葉子 . . .

晴彦 どっかから盗んできたんか。

葉子 まさか。

晴彦 じゃ、どうしたんや。一体。

葉子 父に頼まれて用立ててきたの。これが家の最後の財産。一家四人を支える最後のお金。

晴彦 じゃ早く家に帰らなあかんやないか。お父さん、きつと待つてはるで。

葉子 ねえ、晴彦。

晴彦 このお金でいっそ二人で、どっか行かない？

葉子 どっか？

晴彦 そう。

晴彦 どっかって、どこや。

葉子 わからない。

晴彦 わからないって。

葉子 私たち二人を知ってる人が誰もいないところ。まだ行ったことのないところ。

雪国もいいわね。

そうさ。

黒部なんてどう？

私昔から憧れていたの。

黒部？

そこで一体なにするんや。

何だっついていいじゃないの。小さな家借りて二人で暮らすのよ。晴彦は仕事に行く。私は家で待つ。

つまり、結婚するってことか。

そう。

私、今度こそ一生懸命やるわ。

一生懸命。

大根刻む。葱も刻む。

晴彦　なんで黒部なんかに行く必要あるんや。

葉子　・・・もう、疲れたの。

晴彦　疲れた？

葉子　家の事。それから・・・。

晴彦　それから・・・？

葉子　小説の事も。

晴彦　小説がどないしたんや。

葉子　もう書けないのよ。もう駄目なの。

晴彦　今日先生にも挨拶してきたわ。

葉子　小説書くのもうやめるって。

晴彦　ふーん。

葉子　平凡な普通の女になるわ。晴彦のおかみさん。

晴彦　黒部で？

葉子　そうよ。

晴彦　なんで？

葉子　いったでしよ？

葉子　私雪が大好きなの。

晴彦　・・・真っ白い雪。

葉子　きつと私を真っ白に戻してくれるはず。

晴彦　（侮蔑の表情）へえ。

葉子　なによ。

晴彦　なんかおかしなもんやなあ。

葉子　えっ。

晴彦　そうやろ？

葉子　何が？

晴彦　俺は俺で一生懸命俳優修行してるんや。

葉子　それを捨ててまで、なんで黒部まで行って暮らさなあかんのや。

葉子 黒部が嫌なの？

晴彦 嫌やわ。そんな辛気くさいところ。

葉子 じゃどこだっていいわ。私と一緒に。

京都は？

そうだ。いつそ東京の下町なんてどう？

晴彦 だから、なんであんたにそこまで俺がつきあわなきやあかんのや。

葉子 そ、それは・・・。

晴彦 なんて。

どうして。

葉子、晴彦を抱きしめる。

その頭を愛しそうに撫でる。

葉子

だって。

私もう晴彦と離れられないもの。

あなたは私に消えることのない印をつけたの。

わかるでしょ？

晴彦、されるままになっている。

葉子

私、晴彦にあだ名をつけたの。

晴彦

・・・。

葉子

「鉄路のほとり」っていうの。

スライドが写る。

夜の六甲駅。

阪急急行列車の先頭。

晴彦 ……「鉄路のほとり」……  
葉子 晴彦は高架下の湿った空気の似合う人だから。  
晴彦 ……「鉄路のほとり」……  
葉子 意味わかる？  
晴彦 ……  
葉子 私がいつも考えている事。

私の心にいつも浮かんでくる事。  
子供の頃からいつもそうだった。  
銀色のレールがどこまでもものびている。  
はがねの刃は誘うように光っている。  
そこはどこ？  
……阪急の六甲駅？  
そこで、列車を待っている私がいる。

スライドの列車、ゴーツという音と  
音とともに疾走してくる。  
その前に立つ葉子。

晴彦 ……  
葉子 車輪が疾走してくる音が近づいてくる。  
今だわ！  
あのレールの真ん中に私は飛び込んで行く。  
鳥のように羽を広げて。  
……私の心の奥で私が一番望んでいること。  
……  
葉子 そうすればなにかも解決するのよ。

晴彦  
葉子

わかってるの。  
何度もそうしようとした。

でも、できない。

今日こそ実行しようとしてその場所まで行くのに。  
最後の最後のところになると。晴彦の顔が・・・浮かんできて。  
あなたの体がすごく暖かい事。あなたがあの夜泣いてくれた事。  
そして私にするしをつけた事。いつも私をひきとめるの。  
晴彦が。

だからあなたは「鉄路のほitori」なの。

スライドの列車寸前まで迫っている。

晴彦  
葉子  
晴彦  
葉子

・・・。  
一緒に死んではいわない。  
・・・。

お願い。

私と一緒に逃げて！

スライド消える。

葉子  
晴彦  
葉子  
晴彦  
葉子  
晴彦

私と一緒に逃げて！

何から？

だから、私の周りの全て。

私の・・・周りの・・・全て？

そうよ。

随分・・・。

葉子　・・・・。

晴彦　随分・・・ごてついた芝居やな。

葉子　えっ。

晴彦　第一、あまりにも自分勝手すぎるわ。

葉子　えっ。

晴彦　じゃ、俺は一体どうなるんや。

葉子　俺は・・・。

晴彦　晴彦。

葉子　俺があんたと逃げたとして、俺のおかあちゃんは一体どうなるんや。俺の病気のおかあちゃんは。

葉子　そ、それは・・・。

晴彦　やっぱり自分の事しか考えてないんや。

葉子　そ、そんな事ないわ。

晴彦　そうやないか。

葉子　もう、とつてもついていけんわ。

晴彦　晴彦。

葉子　お嬢様のお遊びの相手には、俺は役不足やわ。

晴彦　そんな。

葉子　・・・これで・・・。

晴彦　晴彦。

葉子　終わりやな。俺たちの仲も。

晴彦　えっ。

葉子　今日は大晦日や。ちようどきりがええやないか。明日の新年からなにもかも新規巻きなおしや。

晴彦、浴衣を脱いで、自分の服に着替えはじめ。

葉子　な、なにいつてるの！

晴彦　俺はこれでも普通の生活者のつもりや。

葉子 あんたにはとてもついていけん。  
・・・晴彦。

晴彦 大晦日の土壇場に電報で呼びだされて、私の全てから逃げて？  
気違いぎたや。全く。

葉子 ・・・。  
あんたそれ、もしかして自虐を気取ってるつもりか。

晴彦 それ、そんな事ないわ。  
太宰やあるまいし。

葉子 ま、男の自虐は魅力的かもしれないけど、女の自虐なんて・・・はつきりいって醜いだけや。  
・・・なんてこというの。

晴彦 もう、とつてもついていけんわ。  
・・・晴彦。

葉子 ・・・じゃ、帰るわ。  
今まで、色々有難うございました。

晴彦 お世話になりました。

ペコンと頭を下げる晴彦。  
行こうとする。

晴彦の胸にすがりつく、葉子。  
ちよ、ちよつと待って。

葉子 どいてんか。  
お願い、待って。

晴彦 おかあちゃん、具合悪いんや。  
帰らなくちゃ。

葉子 私を捨てるの？  
・・・。

晴彦

葉子 そんな事したら、私死ぬわよ。

晴彦 本当にあの・・・銀色のレールの真ん中にとびこんでうるさいなあ。

葉子 本当に死ぬ。

晴彦 死ぬ死ぬっていう奴が本当に死んだためしがあるか。

葉子 晴彦。

晴彦 本当に心のそこからあなたを愛してる。

ふうん。

葉子 あなたに全てを賭けてます。

晴彦 この淀んだ川から私を助けてくれるのはあなたしかいないの！

もう、聞き飽きたんや！

葉子 晴彦・・・。

晴彦 あんた本当に本当に俺に惚れてるんか。

葉子 あたりまえじゃない。

晴彦 嘘や。

葉子 何が嘘なの？

晴彦、葉子の顔を乱暴に自分の顔に近づける。

晴彦 見てみい。

葉子 な、なにを。

晴彦 俺の目や。

葉子 どうして。

晴彦 何が映ってる？

俺の目に何が映ってる？

葉子 そ、それは。

晴彦 あんたが映ってるやろ。

葉子 ・・・。

晴彦 そうやろ！

葉子 ・・・。

晴彦 それがあんたが一番好きなんや。

あんたが本当に好きなのは、あんた自身なんや。

俺は大事な大事な自分の愛玩物として

利用されてただけなんや。

俺は最初からそれがちゃんとわかってた。．．．じゃあ．．．さよなら。

今度こそ行こうとする晴彦。

葉子、必死で強烈に晴彦の足にすがりつく。

晴彦 はなしてくれ。

葉子 お願い。行かないで。

晴彦 はなせたら。

葉子 嫌よ。絶対はなさない。

なおもひつようにすがりつく。

晴彦 もう！

じゃ、いうしかないんやな。

葉子 なにを！？

晴彦 いわないつもりやったんや。

最後まで。

葉子 だから、なに！？

晴彦 あんたがいわせたんや。

葉子 えっ。

晴彦 ・・・・あんた・・・。

葉子 えっ。

晴彦 ラジオ局の岡田さんと、何度も梅田の待合い行ったんやてなあ。

・・・・それで・・・闇医者で子供も墮ろしたんやてなあ。

葉子 ・・・・。

晴彦 自分勝手に、罪深くて、おまけに・・・

穢れてるんや。

葉子 ・・・・。

穢れてるんや、あんたは。

晴彦 け、穢れてる・・・!?

葉子 この神戸で一番下の下の下の女なんや。

晴彦、葉子を乱暴にふりほどくと

出て行く。

呆然と、残される葉子。

シャンソン聞こえてくる。

葉子 (耳を押さえて)・・・穢れてる・・・?

・・・神戸で一番の下の下の下の下女・・・?

はっと周りを見回す。

晴彦がいないのに、気づいて。

葉子 ・・・・晴彦・・・? 晴彦。

(叫ぶ) 晴彦! 晴彦!

半狂乱で叫び続ける。

葉子 晴彦！晴彦！

しばらくの間。

葉子 駄目だ・・・。

もう、駄目だ。

やっぱり、私は・・・。

あそこに行くしか、ないんだ。

再びスライド映る

阪急六甲駅。

疾走してくる急行列車。

その前に立つ葉子。

照明、暗くなっていく。

シャンソンとともにかすかに縁日のようなザワザワした効果音が聞こえてくる。

#### 4 阪急六甲駅

スライドに文字が映る。

「昭和二十七年十二月三十一日

午後八時

阪急六甲駅」

前シーンから続いている縁日の音、急速に大きくなる。人のかけ声、お祭りのお囃子、雑踏の音。

露店がそれぞれが火をともした看板を出している。

「蕎麦」・・・・・・・・父

「蛸焼き」・・・・・・・・島尾

「輪投げ」・・・・・・・・晴彦

「手相」・・・・・・・・老女

「杏子飴」・・・・・・・・駅員1

「綿あめ」・・・・・・・・駅員2

「ヨーヨー釣り」・・・・駅員3

「ラムネ」・・・・・・・・ミホ

等々

それぞれの店主たち、店じまいにかかっている感じ。

蕎麦

もう、あかんなあ。

人っ子一人通らんわ。

蛸焼き

今年も最後までついてなかったです。

輪投げ

そろそろ店じまいか。

手相

その前に。

蕎麦

えっ。

手相

年越しそば。

杏子飴

ああ、そうですよ。

綿あめ

皆で食べましょう。せめて。

手相

そうよ。

おごって！

蕎麦 えっ。

ヨーヨーおごって。おごって！さつきからお腹すいちゃってもう、駄目。

蕎麦 そないな。勘弁してや。

手相 けち！

蕎麦 おごりたいのはやまやまなんや。

杏子飴 苦しいのは皆一緒です。

ここは割り勘にしましょう。

手相 え、えーっ。

ラムネ まあ、まあ。

手相 じゃ、少しはサービスしてよ。

蕎麦 天麩羅でもいれて。

蕎麦 そりゃ、もう。

ヨーヨー 皆で食べて、今年も終わりましたよ。

蕎麦 じゃ、せめて気持ちだけはこめて作らせてもらいますわ。

葉子とぼとぼと歩いてくる。

水色のトッパークート。白い手袋。

寒くて不安で疲れきってまるで壊

れてしまう一歩手前のその表情。

自殺決行のこの場所。

やっとなここに辿りついたという感慨深い様子であたりをみまわしている。

露天商たち、一様に葉子を好奇の目で見る。

葉子も気がつく。

葉子

・・・えっ？

皆、それぞれ声をかける。

蕎麦

ありや、お嬢さん。

丁度いいところにご登場だ。

蛸焼き

本当。すんでのところで店じまい。

輪投げ

今年最後のお客さま。

綿あめ

せいぜい特別出血サービスさせてもらいまっさ。

シャンソン鳴り止む。

葉子、皆を不思議そうに見る。

葉子

なに、あなたたち・・・？

テキ屋達

(声をそろえて) はい。

葉子

・・・こんな大晦日の夜に？

テキ屋達

はい。

葉子

こんな時間まで・・・？

テキ屋達

はい。

葉子

縁日でもあるまいし。

蕎麦

お嬢さん、なにゆうてはるんや。

六甲駅の前はいつもこうでっしやろ。

葉子

そ、そうだったっけ？

杏子飴

いつも通っている筈ですよ。

ヨーヨー

へんてこな髪型のお嬢さん。

葉子

・・・そうだったっけ？

手相

ふん！まるではじめて見るような顔しちゃって。

葉子じつと見つめる。

目がなれてなにかに気づく。  
蕎麦、蛸焼き、輪投げの三人を改めてまじまじと見る。  
はっとする。

蕎麦 年越し蕎麦どうでつか？

葉子 あ、あなたは……。

蕎麦 えっ。

葉子 お、お父様！

蕎麦 はあ？

蛸焼き もう思い切り大きい蛸入れちゃってます。

葉子 あ、あなたは……。

蛸焼き えっ。

葉子 し、島尾先生！

蛸焼き はあ？

輪投げ 今年最後の運試し。

葉子 大当たりは金時計。

葉子 あ、あなたは？

輪投げ えっ。

葉子 は、晴彦じゃないの！

輪投げ はあ？

蕎麦 はっ？

蛸焼き はっ？

輪投げ はっ？

三人の男、不思議そうに葉子を見ている。  
葉子混乱してくる。

葉子（ひとりごと）・・・そんなわけないわ。

私、おかしくなってるのね。

一体なにしにここへきたのよ。

しっかりしなくちや。

最後の最後くらい。

それにしたって似てる。

似すぎてる・・・

葉子、なおもジロジロと執拗に三人を見ている。

すましている三人。

手相が声をかける。

手相 手相を見てもみませんか。

葉子 えっ。

手相 なにかすぐく困ってるみたい。きっとあなたの悩みを解決します。

葉子 手相・・・？

手相 そうです。

葉子 手相・・・。

葉子、なにかをじっと考えている。

葉子 そうだ。

杏子 餡 どうしたんですか？

葉子 ・・・・急行列車よ。

綿あめ 急行列車？

葉子 皆さん、ご存知ですか？

最後の急行列車の時間。

ヨーヨー 確か、九時四十五分。  
杏子飴 梅田行きです。  
葉子 ……九時四十五分……。

葉子看板に腕時計をかざして見る。

葉子 まだ少し時間あるわね。

・・時間・・。

テキヤ屋達 時間？

葉子 そう。

蕎麦 最後の急行列車に乗るつもりなんやな。

葉子 そのつもりです。

杏子飴 じゃ、まだまだありますよ。時間。

葉子、改めてテキヤ達を見る。

葉子 わかりました。

じゃ、あなたたちのいうとおりになります。

綿あめ つてことは……。

葉子 お蕎麦を食べて、蛸焼きも食べて、

輪投げもして、綿あめと杏子飴を食べて、ラムネも飲み、ヨーヨーも釣り、そして手相を見てもらう。

テキヤ達 えっ。

ヨーヨー お嬢さん。いくら今年最後の出血サービスだっていったってただじゃないのよ！

ラムネ そんな大盤振る舞いするお金。

杏子飴 本当に持つてはるんか？

手相 悪いけど、そんな風に見えない。

葉子 持つてます。

テキヤ達 えっ！  
葉子 お金だけは。

テキヤ達、顔を見合す。

葉子 信じられないなら。  
ほら。

葉子、鞆から札束を取り出して  
見せる。  
テキヤ達、後ずさつて驚く。

蕎麦 す、すご！

蛸焼き 鴨がねぎしよって？

輪投げ 最後の最後に。

ヨーヨー つきがきた！

葉子 これもなにかのご縁ですわ。

このお金はここでパーツと使っちゃいます。

テキヤ達 えっっ！

やったあー！

皆飛び上がり、抱きあつて喜ぶ。

蕎麦（涙ぐまんとして）真面目にコツコツやったらいいこともあるんやな。

蛸焼き 本当に。

輪投げ いい正月がむかえられるわ。

葉子 あんた……ただ……。

テキヤ達 えっ。

菓子 私今食欲は全然ないんです。

とても、お蕎麦も蛸焼きも綿あめも杏子飴も食べられない。

蕎麦 ……なんや。

杏子飴 ……それ。

菓子 ヨーヨー釣りも輪投げもとてもする気にならない。

輪投げ えっー。(へなへなと坐りこむ)

ヨーヨーはあ？(も、へなへなと坐りこむ)

菓子 ただ、手相だけは。

手相 えっ！

菓子 是非見て頂きたいんです。

手相 キャー！(小躍り)

ラムネ じゃいい思いするのは手相さんだけ。

杏子飴 ぬか喜びもはなはだし。

綿あめ アホクサ！

菓子 それじゃ、あまりにも皆さんに失礼。

お金までお見せしたんですもの。

綿あめ そやそや。

菓子 ここはひとつ、手相だけは見てもらい、お礼は皆さんにするということにしてみもらえないでしょうか？

皆 えっー！

蕎麦 そりゃ、ぜんぜんかまわんけど。

ヨーヨー そんなむしのいい話。

杏子飴 手相さん、どうや？

手相 もしほんとにそれでいいのなら、まるで夢みたいなお話しよね。

菓子 そのかわり一つだけお願いがあります。

手相 お願ひ？

菓子 きちんと本当のことを言って下さい。

手相 本場の事？

葉子 おためごかしや励ましは一切いりません。

真実だけをありのままに伝えてほしいんです。

蕎麦 なんや、そんな事か。

杏子 飴 大丈夫ですよ。

そんな心配。

手相 私は普段から本当のことしかいいません。

葉子 どんな不吉なことでもかまいません。

ありのままを教えてください。

手相 わかりました。

葉子 皆さんも・・・

皆さんも一緒に聞いていただけますか？

テキヤ達 そりや勿論！

皆葉子をとりにかこむように立つ。

手相 じゃ、手を見せて。

手を。

葉子、おずおずと手を差し出す。

手相、大きな虫眼鏡を取りだして

じつと見ている。

手相 ふうん。そういうことね。

なるほどね。ふうん。

葉子 ・・・・どうですか。

手相 うーん、そういうわけか。

葉子 ふんふん。  
手相 ど、どうですか？  
それでああなつて、こうなつて、これがこうして・・・。

葉子 大変だわ。  
えっ。

手相 手相によると、あなたは今ものすごく重大な時期に来ています。  
ち、違う？

葉子 ・・はい。

手相 家庭。仕事。恋愛。  
ええ。

手相 すべてに大きく動きがあります。  
そうです。

手相 みつつともが、複雑に絡み合い・・・。  
そ、そう。

手相 人生最大の危機に直面してるといっても過言ではない。  
その通りです。

手相 そしてあなたは今、その危機に押しつぶされんとしています。  
あ、あたってます。

手相 こわいぐらいにあたってます。  
(満足げに) そうでしょう。

葉子、しゃがみこんで頭を抱える。

葉子の脳の音が聞こえる。

何かがグシャツとつぶれる音。

しばらくの間。

葉子、顔を上げる。

葉子 キヤタストロフが襲ってきた。

家庭。仕事。恋愛。

すべてが破滅にむかつていく。

。。。。  
かすかにあつた希望も完全に途絶えた。

。。。。  
もう、一歩たりとも、前に進むことはできません。

。。。。  
だつて。。。。

。。。。  
この世界に私の居場所はもうなくなつてしまつたんです。

。。。。  
疲れた。

。。。。  
疲れた。

。。。。  
もう疲れきりました。

。。。。  
疲れた。

。。。。  
疲れた。

。。。。  
もう疲れきりました。

。。。。  
思いつめて。

杏子 餡  
ヨーヨー 可愛そうに。

葉子 心が傷つき、疲れているのに、何故かそれが体全体に広がっていく。

もう体がそれに耐えられない。

まだ、そんなに若いのに。

綿あめ  
葉子 わかっています。

この疲れは体にくっついていてる蚤とか虱ではないんです。

もう、私そのものなんです。

杏子 餡  
私、そのもの？

だから、この疲れを振り落とすには、

私自身を一举に振り落とすしかない。

ラムネ  
私自身を一举に振り落とす？

ヨーヨー・・・なんかえらい・・・。  
杏子 餡・・・物騒ですね。  
葉子 方法はたった一つ。

・・・それは知っています・・・。

その先までは行きつけなかったけれど、その側までは何度も通いなれた道の筈。  
・・・今夜こそ。

手相

生命力の激しい人はその虚脱感も人一倍激しいのね。

美意識や感受性が強すぎて、現実引き裂かれてしまう。

自分を追い詰めて、追い詰めて、  
とうとう境界線の今夜まで来てしまったの。

葉子

そうよ。

手相

境界線・・・！

葉子

そう。

手相

・・・そうだ。

葉子

そうだったんだ。

手相

私の心の中にいつもあったレール。

杏子 餡

子供の時から、いつもあったあれ。

綿あめ

あれは、私の境界線だったんだ・・・！  
なんか目がギラギラしてきて。

葉子

顔つきも変わってきたで。

手相

・・・境界線を越えるんだ・・・。

葉子

今夜こそ。

手相

心に密かに願っていたこと。

葉子

飛び越えて行けばいいんだ。

手相

今夜。

葉子

今夜。

ラムネ  
葉子

お、恐ろしい。

何も怖がることはない。

不思議だわ。むしろ……。

気持ちがお楽になつていく……。

あのね。

お嬢さん。

お嬢さん！

……えっ？

あなたなにか勘違いしているんじゃない？

えっ。

手相つてね、未来を占うものなのよ。

「これからのこと」。

これから？

そうよ。

これから……？

あのね。

あなた。

全然大丈夫よ。

……なにが？

安心しなさい。

えっ。

安心。

……なにを？

あなた、今夜さえ、過ぎていけば。

……えっ……。

その後の人生は順風満帆。  
すごい幸せになります。

葉子  
手相  
手相  
手相  
手相  
手相  
手相

葉子  
手相  
手相  
手相

葉子  
手相  
手相  
手相

手相

葉子 えっ？

手相 幸せ。

葉子 なに？

手相 幸せよ。

シ・ア・ワ・セ！

葉子 幸せ・・・！？

手相 あなたはものすごい強運の持ち主よ。

金銭には一生不自由しません。

人の何倍もの強靱な健康運。

今後の恋愛運、結婚運にも恵まれます。

子宝は・・・三人ね。

おまげにかなり長生きです。

・・・。

葉子 やったあ！

蕎麦 一生金銭には不自由しません！

輪投げ 強靱な健康。

綿あめ 達成する恋愛。

杏子飴 結婚！

ヨーヨー子供三人！

ラムネ 長生き！

手相 そ！

葉子 ・・・。

手相 ま、そういう意味ではあなたの人生の最大のネックは今夜ってことかな。

葉子 はっ？

手相 とりあえず今夜をなんとか乗りきりなさい。

葉子 はっ？

手相 そういうこと！

葉子 嘘だ。

手相 えっ？

葉子 嘘だ。

インチキだ。

なにが？

手相 さっきのお金に目がくらんで適当なこと言ってるんだ。

葉子 まさか。

手相 それとも、あんまり悲惨なことが出てるから、誤魔化してるの？

手相 なにいつてるの。

ちゃんと手相に出てるわよ。

(葉子の手をとって手相の線をなぞる)

ほら、見て。これがあなたの生命線。

ここがかすかに途切れてるでしょ？

ここの部分が今夜のあなたなのよ。

葉子 ヨーヨー

手相 本当だ。

手相 でも、よく見て。

よく。

葉子、自分の掌をじっと見る。

皆も覗きこんで見ている。

手相 よく見るとその線は途切れたように

見えて、実は途切れてないの。

ほんの僅かだけど、ちゃんとつながってる。そこを境にあとはしっかりとした太い線が長く続いている。

綿あめ

杏子飴 確かにそのとおりだ。

手相 あなたは稀にみる強運の持ち主なの。

勝ち組中の勝ち組！

葉子 (叫ぶ) 嘘だわ！そんな事！

手相 信じられないのなら、信じなくてもいいわ。

葉子 ありえないわ。

手相 私が健康で長生きするなんて。

葉子 . . . . .

手相 ありえないわ。

葉子 私がこの先幸せな恋愛と結婚をして子供を三人生むなんて。

手相 . . . . .

葉子 だって私は今夜。

手相 だからいったでしよ。

葉子 今夜が境界線の夜なら今夜だけ乗りきればいいの。

手相 今夜だけ乗り切れば、あなたはもう大丈夫なの。

葉子 . . . . . どうやって？

手相 えっ。

葉子 どうやって乗り切るの？

手相 今夜。

葉子 今夜？

手相 そう、今夜。

葉子 そ、それは . . . . .

手相 もしわかるなら教えて。

葉子 今夜、どうすればいいのか。

手相 それは . . . . ?

葉子 それは？

手相 そんなこと、占いではわかんないわよ。  
自分で考えなさいよ。

葉子  
手相

・・・やっぱりね。

でも、あなたの持つてる札は最終的には勝ち組の札なの。

それも最高のね。

それだけは絶対絶対確か。

・・・だから？

それがわかっているんだから、今夜一晩なんてどうだっていいのよ。

・・・。

まさかそれをおめおめ捨てるっていうの。

だとしたら、馬鹿よ。

・・・。

最高の馬鹿！

葉子  
手相

葉子と手相、じつと見詰め合う。  
しばらくの間。

・・・。

・・・。

・・・やっぱり・・・駄目だわ。

葉子  
手相

シャンソン聞こえてくる。

スライドにレールが映る。

スライドの前に立つ葉子。

葉子

不思議です。

この先どんなに健康で強運といわれても。

どんなに素敵で楽しいことがあるといわれても。

私の心は弾みません。



葉子  
・・・。

蛸焼き  
なあ！

葉子  
・・・。

輪投げ  
なあ！

葉子  
そんなこと、どうでもいいじゃありませんか。

どうしてそんなこと、はじめてあった、あなたたちに答える必要あるの。

蕎麦  
・・・。

蛸焼き  
・・・。

輪投げ  
・・・。

蕎麦  
はじめて会ったんじゃない。

蛸焼き  
僕たちは。

輪投げ  
あんたがよく知ってる人の筈や。

葉子  
・・・やっぱりね。

蕎麦  
うん。

蛸焼き  
うん。

輪投げ  
うん。

葉子  
お父様。

島尾先生。

晴彦。

・・・。  
そんなはずないと思っただけどやっぱりそうだったのね。

・・・。

わざわざひきとめに来てくれたの？

葉子、家のことは心配するな。金のこと。私の病気のこと。

なんとかなる。

大丈夫です。

蛸焼き  
今は書けなくても、必ず書けるときがきます。

輪投げ

なんとかなる。

俺みたいなふがいないのとは別れてよかったんだ。

次に会う人はきつと素晴らしい人や。

なんとかなる。

葉子

蕎麦

蛸焼き

輪投げ

葉子

なっ。

心配してくれて、本当に有難う。

でも・・・それにはおよびません。

三人

葉子

三人

葉子

・・・ここに来るまで私。

・・・。

色々な理由が私をがんじがらめにして、死にむかわせているのかと思っていました。

・・・でも違っていたんだわ。

手相

境界線の夜。

葉子

この夜の仕業なの？

そう。

多分、そう。

綿あめ

杏子飴

スライドが映る。

最終の阪急急行列車の先頭。

ゆっくりと走ってくる。

若い人間は自分のことしか考えないんやね。

固い果実は風に一揺れ二揺れただけでもう見切りをつけてしまうんですか？

ヨーヨー もつたいないわ。

ラムネ もつたいない！

葉子 . . . . .

手相 そうだわ！

いいこと考えた！

テキヤ達えっ。

手相 こうすればいいのよ。

今夜が問題なんでしょ？

それなら今夜だけ、もう考えるのも

感じるのも、やめてしまえばいいじゃない？

杏子 餡

綿あめ そうや！

ヨーヨー そうよ。

そうすればいいのよ！

葉子 . . . . .

手相 . . . . . 息を潜めて、ただ待つよ。

この夜が過ぎていくのを。

葉子 . . . . .

手相 . . . . . 朝になれば、新年。

葉子 . . . . .

手相 この夜はなかったことにしてしまつてまた新しくはじめればいいのよ。

なにもかもうまくいくわ。

葉子 . . . . .

手相 ひとりでいるのが怖いのなら、

私たちが一緒にいてあげる。

朝までずっと。

ねっ。

ヨーヨー 勿論。

ラムネ 何も考えない。

何も感じない。

綿あめ 一晩くらい、あつという間や。

葉子

こんな夜は誰にでもくるわよね。

手相

蕎麦 そや。そや。そや。翌朝起きて、夕べは何故あんなに思いつめたんだらうと。

蛸焼き 人生なんて毎日毎日その繰り返しや。

綿あめ

葉子

のりこえましょう。

手相

皆と一緒に。

ヨーヨー 何も考えない。

何も感じない。

綿あめ ただ、それだけ。

杏子飴 簡単なこと！

手相、テキヤたち、葉子をとりにかこむ。

静かに歌いだす。

♪「飛べない鳥飛ばない鳥」(by 下田逸郎)

♪おお、あなた飛べない鳥で空の高さが怖い

おお、僕は飛べない鳥で自分の翼も見ない

いつのまにか死ぬ

それが怖くて

ふたりで作った嘘・夢・涙

みんな変えて  
ひとりで飛び立つ自分に泣いて  
ひとりとひとりで歩くと笑う

ああ、あなた飛べない鳥で飛びたい思いでもがく  
おお、僕は飛べない鳥であがいた翼を憎む

いつの間にか知る  
それが怖くて

ふたりで作った恋・話・明日  
みんな変えて

ひとりで飛び立つ自分に泣いて  
ひとりとひとりで歩くと笑う

おお あなた あなた あなた ♪

葉子  
手相

・・・出来ないわ。  
えっ。

葉子

何も考えない。何も感じない。

皆

そんなこと、出来ない。

葉子  
手相

・・・そんなこと、できない。  
たった一晚じゃない。  
ううん。

この夜があつたから。  
こんなに美しいから。

手相

・・・私の生が一番輝く・・・  
・・・大事な大事な夜ですもの。  
・・・じゃ、行くつもりなの？

葉子  
．．．はい。

手相  
どうしても!?

葉子  
．．．。

手相  
行かないで!

葉子  
．．．。

手相  
ねえ!

皆  
．．．。

手相  
(すがりついて叫ぶ) 行かないでよ!?

葉子、手相をふりほどいて毅然と前を向く。

葉子  
．．．この夜に、ついていきます．．．

手相  
じゃ、さよなら?

葉子  
．．．。

手相  
さよならってこと?

葉子  
はい。

皆  
．．．。

雪がバラバラとふってきた。

葉子  
煙草でも吸おうかな。

最後の．．．ゴールデンバット。

どうですか?

葉子、鞆から煙草を取り出すと何人かに配り、火をつける。  
雪の中に何本もの紫煙が立ち昇っていく。

葉子

(空を見上げて) 雪だ。

私の大好きな雪だ。

なんて綺麗な夜。

なつかしい気持ち。

境界線の夜。

少女の頃のあの夜が戻ってきたみたい。

アナウンスの音が聞こえてくる。

声

たいへん長らくお待たせ致しました。

まもなく梅田行急行列車がまいります。

なお当電車は本日の最終電車となっております。

葉子

(ハッとして) 行くわ。

急がなきゃ。

スライドの急行列車の先頭。

ゴーツと列車の大音響の音。

手相

・・・止めても無駄なのね。

葉子、スライドに向かって歩いていく。

手袋をはめた手を得意げにヒラヒラと振って。

葉子

さよなら！

さよなら！

しばらくの間ー。

キキーツという急ブレーキの音。

声が聞こえてくる。

声1 「ただいま、東急田園都市線三軒茶屋駅にて人身事故が発生いたしました。渋谷駅より中央林間駅までは運行を中止しております。お忙しいところ恐縮ですが、ご乗車のお客様はそのままお待ち下さい」

声2 「お知らせ致します。中央線中野駅においておきました人身事故の影響により、この電車はこれより運行を停止します。運行再開のめどは立っております」

声3 「お急ぎの所、申し訳ありませんが、都営浅草線内、押上スカイツリー駅におきました、人身事故の為、運転を一時休止させて頂いております」

声4 「山手線田端駅構内でおきました人身事故の為、山手線は只今、運転中止となっております。お急ぎのお客様は、地下鉄、バスによる振替輸送をご利用下さい」

声たち、混じりあいながら、リフレインし、やがて絶望的なノイズとなっていくー。

## エピソード

シャンソン聞こえてくる。

女の家のお台所。

女 ふーっ。出来たわ。

今年も・・・なんとかやったわ。

いつものメニューよ。

毎年繰り返し返される大晦日の仕事。

一年で一番アドレナリンが放出される時。

黒豆。たたきごぼう。伊達巻になります。昆布巻き。取り寄せのカラスミと数の子。筑前煮。

．．．それからローストビーフ。

絶対本物中の本物よ。

このローストビーフの味だけは。

誰にも負けないわ。

このローストビーフを作るために、八十五年生きてきたんだわ。

同じことを繰り返して。

毎年、毎年。

と、澄子が帰ってくる。

胸にファイルを抱いている。

澄子 おばさま、ただいま。

女 澄ちゃん！

澄子 遅くなりまして、すみません。

女 心配したわよ。

人身事故がたっくんあったんでしょ？

大丈夫だった。

．．．はい。

なんだかすぐく疲れてるみたいね。それで、なにかわかったの？

．．．．

．．．．そうでしょ？

だから言ったじゃない。

でも、大丈夫です。

澄子 おばさま、久坂葉子を研究してるものにとって今日は特別な日なんです。

今九時二十分。

もうすぐ。  
もうすぐだわ。  
きつとすべてがわかる。

澄子の手からファイルをとる。

女（読んで）「久坂葉子・その夭折そして伝説」

ふうん。

澄子 もうすぐ、なんです。

女 ……澄ちゃん、どうして久坂葉子なんかに興味持っちゃたの？

澄子 えっ？

女 全然たいした作家じゃないと思うけど。

大学院で、こんなごたいそうな論文のテーマになるような人なのかしらね。

澄子 そんな事ありません。

あれだけの美貌と非凡な才能。元貴族の令嬢。

なにより当時の最年少芥川賞候補者。

……そして……。

死んだからね。

女 えっ。

澄子 死んだからでしょ？

女 そうです。意志的に自殺した。

澄子 大晦日に片目をつぶされ、ルール上をひきづられ、バラバラになって死んだから。

女 夭折です。

現代ではもう多分ありえない夭折です。

ふうん……。じゃ、もし……。もし久坂葉子が死んでなかったら。

澄子 えっ。

女 もし葉子があの時死んでなかったら、

澄ちゃん、それでも興味持った？  
研究した？

澄子 女  
そ、それは……。

死んだからこそ価値があるのよ。  
久坂葉子は。

澄子 女

大晦日に列車に飛び込むなんてはた迷惑なこと、  
おいそれと誰にでも出来る訳じゃない。それを本当にやった  
澄子 女  
から、皆をびっくり、唾然とさせたってわけよ。

女、ふつと吹き出す。

澄子、驚いて女を見る。

女  
……私ね……やつと、思いだしたのよ。

とつても大事なことを。

澄子 女  
……えっ?!

……思い出したの。

澄子 女  
そしたら……

うふふふ……

澄子 女  
……。

うふふふ……

女、笑い出す。

次第に激しくなっていく。

ついには涙などもながしている。

女 あっはっはっは！  
澄子 ど、どうしたんですか？おばさま。  
女 おかしくて、おかしくて。  
澄子 一体なにがそんなに。  
女 ねえ、すごい事教えてあげようか。  
澄子 えっ。  
女 あっはっはっは！  
澄子 何ですか、一体！  
女 あのね。  
澄子 えっ。  
女 ……死んでいなかったのよ。  
澄子 ……だ、誰が？  
女 久坂葉子。  
澄子 えっ。  
女 本当よ。これ。  
澄子 嘘……。  
女 だってね、あの日、阪急六甲駅に梅田行き急行列車は来なかったのよ。  
澄子 九時四十五分に。  
女 何故？  
澄子 前の駅でホームに落ちた人がいたの。  
女 電車は急停止。  
澄子 間一髪で間にあってその人は命をとりとめた。  
女 でも、それで電車が六甲駅についたのは大幅に遅れた。  
澄子 そんな。  
女 もうひとつ教えてあげようか？  
澄子 なに？  
女 そもそも、あの日葉子は六甲駅のホームまで行かなかった。

澄子 えっ。

女 駅の前で手相見にあつて、その人にこの後の人生は順風満帆だつていわれて考えを変えたのよ。自殺はとりやめ。

澄子 まさか。

女 事実よ。

澄子 どうして？

女 えっ。

澄子 あのー、どうしてそんな事ご存知なんですか？

女 それは・・・。

澄子 どうして？

女 えっ。

澄子 何故？

女 ……だつて・・・私・・・久坂葉子だもん。

澄子 ……。

女 さつき、やつと・・・

女 やつと、思い出したの！

澄子 おばさま。

女 ……昭和二十七年だつたわね。あれからもう六十・・・（指で数えて）四年もたつちやつた。

女 今は・・・平成・・・二十八年？私はいつのまにか・・・八十五。

女 黒豆を煮るのとローストビーフを作るぐらいしか、能はないただの老いぼれ。

澄子 ……。

女 生きてみたの。

女 とりあえず生きてみたの。

女 頑張ったわよ、

女 すごい頑張ったけど作品は書けずじまい。

女 文学少女に毛が生えただけ。

女 そこら中にうじゃうじゃいる人種の一人にすぎなかつたわ。

澄子 自殺でもしなきゃ、何の意味もないただの女。  
・・・。

女 澄子 でも、不思議だわ。  
手相見のいったことはあながち外れてなかった。  
私、幸せに、なった。

澄子 順風満帆なんかじゃなかったわよ。  
それは全然はずれ。

女 困難に次ぐ困難。

澄子 そして時代はすごい勢いでコロコロ変わった。  
金を稼ぐ、ただその為だけにね。

女 皆節操もなく一緒に変わっていく。  
そんな世の中についていけない訳ないじゃない。私はずっーとはぐれ者だった。

澄子 友達も結局一人も出来なかった。  
でも二度と死のうとはしなかった。

女 澄子 あの・・・あの・・・夜から。  
・・・。

澄子 続いていく時間。  
なにもない時間。

女 澄子 いつ果てるかもしれない時間。  
私はひたすらそれを受け止めた。

澄子 澄子 ただひたすら受け止めた。  
・・・。

女 澄子 すると。

澄子 澄子 すると？  
するとある時なにもかもがふっと逆転したの。  
えっ。

女  
澄子  
えっ。  
・・・なにかもよ・・・

女  
澄子  
あの頃許せなかったことが許せるようになったの。  
あの頃醜くて思わず目をそむけていたものが本当は美しいって気づいたの。  
あの頃耐えられないと思ったことに耐えることが、なにより価値があるって、わかったの。  
不思議でしょ？

女  
澄子  
生きてるって・・・やっぱりすごいわ。  
・・・すごい・・・

女  
澄子  
毎日、感じていく。出会っていく。作っていく。  
毎年毎年・・・黒豆を煮る。  
筑前煮を作る。

女  
澄子  
ローストビーフを作る・・・。  
やっとなかったのよ。

女  
澄子  
謎がとけたのよ。  
私だけにふさわしく用意された、すごい意味をー。  
・・・。  
自殺するなんてそんなもったいないこと。そんなおこがましいこと。

女  
澄子  
そういうこと。  
・・・そうだったんですか。

女  
澄子  
女、澄子に近づいていく。  
舐めるように、上から下までじっと見つめる。

女  
・・・わかってるわよ。澄ちゃん。

澄子 えっ。  
女 ……あんたも、あんたも久坂葉子なんでしょ？  
澄子 ……はい。

澄子、カツラとマスクを取る。  
葉子、である。

女 やっぱり。  
葉子 ええ。

女 ……今夜あんたが来るってこともなんとなくわかってた。  
虫の知らせってやつかな。  
葉子 はい。

女 ……あんたは……幽霊よね。  
葉子 ……そう。  
女 なるほどね。

葉子 でも、あなたも……幽霊でしょ。  
女 まあね。

葉子 どっちが本当の幽霊で、どっちが本当の久坂葉子？  
女 今更わからないわよ、そんな事。

葉子 ……私もわからない。  
女 そもそもわからない。

葉子 生きてる方が勝ちなのか？  
女 死んだ方が偉いのか？  
ほんとは。

向かい合う。  
じつと見詰め合う二人。

シャンソン聞こえてくる。

女

本当はずっと待ってたのよ。

六十（指で数えて）・・・四年間。

あなたが私に会いにくるのを。

ええ。

女

パーティーよ。

そのためのお料理なの。

葉子

ええ。

お互い着ているコートと割烹着をそれぞれ脱ぐ。

黒いスパンコールが眩しい、お揃いのドレスを着た二人が！。

女

死んじゃった、私ね。

葉子

生きてきた、私ね。

女

わがままで、あわて者ね。あんた。

そんなに簡単に答えなんて出やしないのに。

葉子

あなたがしぶとくて、しつこいのよ。

女

どんなに頑張ろうと駄目なものは駄目。

でもずっと後ろめたかった。

あなたは、正直だわ。

なによりも勇気がある。

葉子

私だって羨ましかった。

女

えっ。

葉子

やっぱり、早まつちやったのね。

女

馬鹿だったわ。

・・・

葉子 ……  
女 ……夭折した…。  
葉子 ……天寿をまつとうした…。

ふたり、どちらかともなく笑い出す。

女 うふふふ。  
葉子 あははは。

激しくなっていく笑い。  
ひとしきり笑いあつて。

女 会いたかったわ。  
葉子 私も。  
女 ずっと思ってた。

いつもいつも考えてた。  
私だつて。

女 ……ずいぶん時間がかかったわね。  
葉子 六十(指で数えて)……四年…。  
女 ……本当に。

あなたに会えたつてことは、  
……じゃやつと私も…。

女 ……そうかもしれない。  
葉子 じゃ、今度こそもう離れなくていいのね。  
女 そうよ。

……良かった。  
女 ……ほんとうは心細かったの。

葉子 寂しくてたまらなかったわ。

女 一緒にいようね。

葉子

うん。

女 これから、ずっと。

葉子 うん。

ふたり、再びじつと見詰め合う。

雪がふりだす。

女 夜らしい夜だわ。

葉子 少女の頃の夜がもどってきたみたい。

女 綺麗な夜。

葉子 大晦日よ。

女 明日からまた新しい一年が始まる。

葉子 今までのことは今夜中にチャラにして。

女 やっぱ死ぬんだったら、今夜。

葉子 生と死の境界線の夜……。

女 …… たった……。

葉子 …… ふたりきりね……。

女 (少女のように) うん……。

ふたり、愛しげに抱きしめあう。

雪、激しくなっていく。

二人、抱き合いながら、花道をいく。

再び冥途への道をいこうとするふたり――

その時舞台上には、テキヤ達が現れる。

「飛べない鳥、飛べない鳥」を絶唱する。

「還ってこい」というように。

それは生の讃歌でもある。

そして「生」と「死」、そのあわいを目撃する人々（観客）

終わり